

ひょうご現代詩集2016

このたび私たちの兵庫県現代詩協会は二〇周年を迎えました。それにしてもあつという間の二〇年であったような、またその間、何をして来たのかと思わず自身に問い返したいような歳月であった気がしています。そこで触れずにはいられないのが二〇年前の「阪神・淡路大震災」です。

震災の三カ月後に「アート・エイド神戸」の編集で『詩集・阪神淡路大震災 第一集』が「惨禍を越えて一五五名の詩人が証言する激震の世界」として刊行され、翌年の一月一七日には一二九名が『鎮魂と再生』を、そして二周年を前にして同じく一二九名の詩人による第三集『復興への譜』が刊行されました。まだライフラインもままならないのに、アート・エイド神戸実行委員会を立ち上げ、神戸市内、阪神間在住の詩人のみならず、遠い地域の詩人たちへの結集をいち早く呼びかけた伊勢田史郎さんの行動がこういった大きな貴重な記録につながったのでした。

兵庫県現代詩協会は地震の翌年、一九九六年一月に、発起人会、準備会を重ねながら、創立しましたが、そういう意味では神戸の地震の中で、あるいは地震の体験を軸に広く県全体に呼びかけて詩人たちが結集したといっても過言ではないでしょう。第一回の設立総会は芦屋市民センターにおいて、会員一九四名、うち出席者六十三名、委任状一二〇名、席上初代会長には安水稔和さんが選出されています。

あれから、今年で二〇年です。もう一度「阪神・淡路大震災」に戻れば、神戸の地震は戦後技術革新の時代のなかで発展した人口一五〇万ともいわれる大都市が一瞬にして崩壊するのを経験したものでした。戦前の関東大震災のような、木と紙と土でできた日本家屋の崩壊ではなく、コンクリートでできた都市の、高層ビルや高速道路が崩壊したという意味では歴史上はじめてで、私たちの詩はそういうなかで向き合わざるを得なかったのです。私たちひとりひとりが詩を通して現実を迎えるということをやってきたのだと思います。思えば第一次世界大戦と第二次世界大戦の間も二〇年です。同じ時間が経ったのだなあと改めて思います。

ここで私たちはこの二〇年、何をして来たかを問いなおし、改めて、今後なにを成すべきかと問うことが大事です。震災後二〇年（＝協会設立から二〇年）という意味を大事にしなから、同時に、どう向き合ったかを問い直し、未来を考えることは、大都市直下型地震を体験した私たちだからこそしなければならぬことではないかと思えてなりません。

ついでながら、兵庫県は地理的には瀬戸内海と日本海に面しており、こんな県はほかにありません。また会員数においても一五三名の会員数を有する県はほかにありません。二〇周年を機に、兵庫県現代詩協会のひとりひとりが改めてしっかり詩に向き合い、互いに詩を語り合えるいい場に協会がなればうれしいです。

目次

二〇周年を迎えるに当たってたかとう匡子	二	池の畔で／エレベーター	岩井八重美	四〇
迷い人たち	八	大坂の陣	岩崎 英世	四二
一月半ば神戸の街	一〇	霧の朝 ―砂丘より―	岩崎 風子	四四
八月	一二	水の帽子をかぶると／駐車場で眠っている		
こんな朝はそうやってこない	一四	レクイエムと誕生の交響詩 スクランプルするロー	植村 孝	四六
ホームにて	一六	ドにて	内田 正美	四八
過去そして現在	一八	饒舌な海鞘	梅村 光明	五〇
遠い場所から	二〇	草地	江口 節	五二
ひそかな裸足	二二	そんな気がする	大石 玉子	五四
夕映え	二四	果て無し山脈に広がる虚数空間	大賀 二郎	五六
ととやみち (魚屋道)	二六	一歩前に	大西 隆志	五八
抜気のうた	二八	なにも聴こえない	大橋愛由等	六〇
旅立ち／ドラキュラへの伝言	三〇	お受け取りください	尾崎 美紀	六二
影	三二	木の思い	和 比 古	六四
蠟梅がこぼれ	三四	トクサ／花散る里	かただときこ	六六
咲友の髪の毛	三六	アオキさん／地獄の日々／ゴクラク、ゴクラク、	神尾 和寿	六八
青いねずみ、十字に走る	三八	／初恋のひと	亀井眞知子	七〇
		水の器	香山 雅代	七二
		松毬		

ジグメント・フロイトの帽子	七四	日本人ユダヤ人同祖の歌	眞田 千穂	一一〇
双魚	七六	たとえインスタントでも	佐野 博美	一一二
ホテルで	七八	シオン城の聖像	在間 洋子	一一四
あおい影に／まんまる虹	八〇	一輪の花／あれこれ	直原 弘道	一一六
冴子の世界	八二	空を飛ぶ蛇／切り岸まで	紫野 京子	一一八
細い月／ウサギ	八四	師走の京都	柴田 実	一二〇
垢をもつて垢を落とす	八六	糸とんぼの来る日	鈴木 賀恵	一二二
南洋の木鉢	八八	罔象女―伊勢田史郎追悼	鈴木 漠	一二四
春／蟬しぐれ／冬苺	九〇	冬の日	関 はるみ	一二六
バナナ日和	九二	ひがしひめじ	高谷 和幸	一二八
蜥蜴と女性的姿態について	九四	殃禍	たかとう匡子	一三〇
昼の月	九六	ほくらの戦争 中学生敗戦日記	高橋 夏男	一三二
夕刊／夜の闖入者	九八	まだそこにいる	高橋富美子	一三四
おとぎ話	一〇〇	証言	たかはらおさむ	一三六
塔の上	一〇二	「三月十七日 コロンダ」	滝 悦子	一三八
都会の孤独／忘れられないこと／人生百歳時代／蘇	一〇四	美術展へ行つて	田中 信爾	一四〇
州夜曲の街	一〇六	生きることとは	田中 信爾	一四二
思惟	一〇八	三つの世界	田中 敏弘	一四四
紫陽花	一〇八	採寸	武内健二郎	一四六
鹿兎の流れ／川のポエジー／花の平和／沼島登	一〇八	大根譚	谷田 寿郎	一四八

花の木(湖東三山への途次で)	猪のレシピ	昭和十七年十二月	詩よ／プリエール	Who has seen the wind?	往きめぐる季は	みみがさき	枯れ木に花を	礼装	ブックカフェ・ZAKKA	迷夢	New seasons 四つの季節	行き過ぎがたき世に	精進料理	あじさいと銀の雨	水平線が見える	朝のあいさつ／亡母の箆筒／受難の時／今／二歳	傘	董色	谷部 良一 一五〇	玉井 洋子 一五二	玉川 侑香 一五四	月村 香 一五六	寺田 操 一五八	鳥巢 郁美 一六〇	時里 二郎 一六二	時安 喜子 一六四	富 哲世 一六六	豊崎 美夜 一六八	内藤富美代 一七〇	中堂けいこ 一七二	永井ますみ 一七四	長尾 佳枝 一七六	中島 瑞穂 一七八	中川 道子 一八〇	中島 友子 一八二	中嶋 康雄 一八四	中谷 恭子 一八六	土に魂を	ふしぎな電車―夢の中の記憶	なす・こういち	西海ゆう子 一九二	西川 保市 一九四	西村 好子 一九六	西村 善三 一九八	にしもとめぐみ 二〇〇	野口 幸雄 二〇二	野田かおり 二〇四	信定 和美 二〇六	橋本 千秋 二〇八	八田 光代 二一〇	浜田多代子 二一二	春名 純子 二一四	平岡けいこ 二一六	坂東 里美 二一八	福田 知子 二二〇	福田さとの 二二二	福永 祥子 二二四	中根美津子 一八八
----------------	-------	----------	----------	------------------------	---------	-------	--------	----	--------------	----	-------------------	-----------	------	----------	---------	------------------------	---	----	-----------	-----------	-----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------	---------------	---------	-----------	-----------	-----------	-----------	-------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------

循環バス	TABACCO／高校時代／ジュン	家に帰ろう	不在	ケ・セラ・セラ	ホタル	その夜に	山科疏水／満月幻想	明日	足の記憶	参加しながら	久保山さんと久保さん―二〇一六・五・九の夕刊に思う	手を振り続ける	花のドミノ ラヴェル「フォーレの名による子守歌」にのせて	過ぎゆく	鳥よ／くすぶる小枝／声	二十一年目	藤井 清 二二六	藤原 清志 二二八	牧田 榮子 二三〇	増田まさみ 二三二	松尾 茂夫 二三四	松下 玲子 二三六	丸田 礼子 二三八	瑞木 よう 二四〇	水こし町子 二四二	宮浦 久子 二四四	宮川 守 二四六	三宅 武 二四八	室井 正彰 二五〇	望月 逸子 二五二	森田美千代 二五四	安水 稔和 二五六	山口 洋子 二五八	沙羅の木	榎み給うのか「皮クジラ」／ポケット	ナイロビの風	母となり	泉 <small>いづみ</small>	ピエロ	短詩五篇	君は何色／プラス1の愛	瀧へ	兵庫県現代詩協会 二〇年のあゆみ	編集メモ	山下 晴久 二六〇	山崎 啓治 二六二	山本 真弓 二六四	油井 和代 二六六	由良佐知子 二六八	横山美代子 二七〇	吉田 草平 二七二	凜 清太 二七四	渡辺 信雄 二七六	二七八	三二四
------	------------------	-------	----	---------	-----	------	-----------	----	------	--------	---------------------------	---------	------------------------------	------	-------------	-------	----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------	-------------------	--------	------	----------------------	-----	------	-------------	----	------------------	------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	----------	-----------	-----	-----

## 迷い人たち

亜衣 みずよ

緑道で 男は 女を 追いかける  
眼を輝かせて  
女は さっと横道に逃れた

女は スーパーで 品定めをしていた  
男が 近寄って来たら  
ヒョイ ヒョイと隠れん坊

犬と散歩に出かけた  
男も 犬を連れて 向かってくる  
リードを 引き寄せ やりすごす

無言電話も

二、三十年も それらが続いていた  
嘔吐を催した

バス停の暗がりでは しどろな髪の女の姿が  
妻は 夫と女を 待ち伏せていた  
そんなに やつれて 自業自得と違うか？  
あんたら二人は共犯でしょ  
いえ あんたこそ 主犯です  
妻は女を見て あつと言って 消えた

遠くの街角で しょぼしょぼの老人が  
杖をついて ふらついていた  
正面衝突だ 矯めつ眇めつ のぞいてみた  
あの男だ すっかり おじいさん

迷路のむこうに 小さな明かり  
時間がない 急がなくなっちゃ！  
暗がりを ぬけよう  
早く！ 時間がない！

## 一月半ば神戸の街

青木 左知子

車窓は  
裸木たちからの  
渴いた風を  
遮断する  
かれらの立ち居は揺るぎはしない  
寒ぞらに屹立する等間隔の  
孤独

きりりと美しい一樹一樹  
わたしのなかでこの街は  
いまも傾斜していて  
バーゲンセールの紙袋  
いくつも抱えたピンヒールに  
亀裂の道を歩ませ  
若いカップルの崇め見る  
高層マンションの窓の方眼を

三角にゆがめ  
車窓の夢路  
縦横に  
おおきく起伏する  
装いは惨さ隠滅かくしてしまう  
もどさなくてはならない  
もどしては  
ならない  
しどろもどろの反意が  
遁走曲フイガになって追ってくる  
あそこに立つ  
裸木たちだけ  
等間隔に孤独を保ち  
がっしりと  
生きて

## 八月

朝倉 裕子

真夜中の街の底で  
まだ恐れを知らない子どもたち  
カメラの目の中を  
行つて

戻つて

しやがみ込む

消える

漂う

理由は大人になつても説明できない

どんな鎖で守るだろう

大人になるのは難しい

塀の一角を切つて

お地藏様が祭られている

袋菓子<sup>①</sup>が並んで

子どもたちを待っている

猫も並んで

今日は地藏盆

せめて 眠りは深く

目覚めは新しい朝であるように

※二〇一五年八月に寝屋川市で女子と男子の中学生が商店街で  
明け方に連れ去られ、殺害される事件がおきた。

こんな朝はそうやってこない

芦田 はるみ

雨戸をあけると

太陽の光は私の窓に届かなくなって  
向かいの壁を白く照らしていた

鳥が鳴いている

虫の声

川のせせらぐ音

かすかにざわめきが始まっている

雲がこんなにもたくさん浮いているのに

空は水色

幼な友だちがやってきた

生まれ育った土地を離れてもう何年でしよう

この間行ってきたのよ

新しい駅ができていたわ

あなたの家を探したけれど

わからなかった

怖い犬がいた道をおそるおそる通って  
門の外から大声で呼んだあの家よ

庭に出てミントを摘む

元気になったかなとバジルを裏返す

小さなおんぶバツタが飛び出した

きつとメスね

私のハーブを食べないで

捕まえて反対側へ逃がす

摘んだばかりのミントの香りが

掌でふくらむ

立ち上がる

橋のうえで体操する老夫婦がみえた

今日の朝食はパンにミントティーと

さつまいもの甘露煮

ちよっと変

むかいあってほおばる人の髪にも

白いものがちらほら

水色の空の下

どこかで

犬が吠えているのが聞こえた朝



## ホームにて

飛鳥井 れん

千切るように

まぶたを 開きました

眩しさが 雪崩れてきます

透明なクレバス 底の底です

屋根ガラスに

水輪が ゆらめいて

酸欠の檸檬が 泳いでいきます

手を伸ばすと 尾びれに はじかれました

鼻上げしなければ

吸って 吐いて 吸って 吐いて

光の瘤が 胸を圧さえます

波に なれませんか

ドクツドクツ

心音が 耳を塞ぎます

手足から 冷たい

身体は 止められません

恐怖が 脈拍より 先をはしります  
腐ると 毛穴からも  
体液が 流れるのでしょうか  
貧血の鴉が 空から はがれ落ちました

若い男や女が 眼を射ます

柔らかな股関節 骨盤の張り 尻の弾力

炎暑を咬みかえず 力です

洗浄液で みがいた 真昼

行き場のない蟻は

アルコール綿で 拭きとられます

吸って 吐いて 吸って 吐いて

息継ぎのバトンが つながりません

貨物列車の 響きは やさしい

コンテナの暗闇に 指をからませました

そうすれば・・・

横隔膜の波音が

聴こえる気がしたのです

## 過去そして現在

あだち かつとし

### 小学校入学

母に連れられて校門をくぐった  
さくらは満開  
写真を撮ったが  
不安そうな顔をしていた

### 春の山

少年の日 父と一緒に山へ  
柴刈りをして鉄車に積みこむ  
ふうんと  
木の命が匂っていた

### 中学時代

放課後グラウンドを走った  
死や生を深く考えなかった

好奇心は旺盛であったのに  
勉強はしなかった

### 高校入学

新しい自転車に乗って通学  
腕にも新しい時計  
入学式では祝辞が述べられた  
知らない者が多く寒々としていた

### 喫茶店

シヨパンの曲が流れていた  
苦い珈琲  
砂糖もミルクも入れた  
ぼくは十八になった

### 初夏

初夏の光は強い  
山にも野にも照りつける  
稲も実ってきた  
頑張って傘寿まで生きるか

### 減る

山も野も荒れたまま  
獣も魚も棲みにくい  
町も村も人が減り  
やがて地球だけが動くのか

### 人類

青い星 地球  
どこかで兵器が使用されている  
人類はすばらしいのに  
平和への道は遠い

### 満たす

ぼくの心を  
なんとか満たさなくては  
熱い酒をぐっと飲みこむ  
詩を作る

### 年年歳歳

年年歳歳 友が亡くなる  
冬は雪が降り  
春はさくら  
夏は魂祭り 秋は寂しい

## 遠い場所から

阿部 由子

街を囲む山々が色づき稜線が霞み  
景色が拡散しはじめる昼下がり  
黄ばんだポプラの一片に生きるすべを尋ねてみる

あなたに想いを寄せながら  
それを伝えることもできないまま  
わたしはとうとうお嫁さんになってしまいました

ススキの穂が風に揺れ  
枯れそこねたコスモスが頷き  
花卉を小さくねじる

住宅街の小さな公園のベンチで  
陽だまりを惜しみながら  
わたしは手紙を読んでいる

ここ北欧では寒さが和らいで  
束の間の陽光に  
頬がおもわずほころんでしまいます  
あなたとお会いしてから  
もうだいぶ経ってしまいました  
極北の街にも  
小春日和が訪れることを知って  
あなたの温もりを感じています

遠い場所から舞い込んだたよりと  
いまここに居ることの不思議さに戸惑い  
行きかう影が小さく揺らぐ  
遠い未来への時間の軌跡をたどると  
透き通った蒼い空に浮かぶ  
銀色の小さな飛行体

## ひそかな裸足

—二〇二四年五月十八日、神戸 詩を書く人たちの集いのために

安西 佐有理

裸足だ

靴の中、靴下の中では裸足だ

朝の濡れた草はらや

昼のまとわりつく砂、

夜の川底でぬめる石こそ踏んでいないけれど

一日中

靴の中で、曲がった小指に至るまで

木綿ごしナイロンごし、

中敷きごし底革ごし、

アスファルトごしに、

ひそかに裸足の足は

街じゅうにはりめぐらされた、震える根を踏んで  
いる

幼稚園児のおしゃべりと、つながれた手の揺れに

葉ずれを呼応させながら

日々老いてきた、クローンの桜を今年も咲かせ、

から元気な街路で、街の炎の薄れる記憶を吸いあ

げるハナミズキを咲かせ、

三人家族の家の土台のしずかななごりが空地に残

る路地の入口で

鋭い棘をかまえて寝ずの番をする黄薔薇を咲かせ

てきた

五月十八日、神戸の地下で震えつづける根を通る

力は

その昔のワタシタチの、緑の導火線を通ってきた

力

時間の輝きと無情のなかで、鎖につながれてうた

われる海の歌、

鶏のレバーを洗った水で描かれる妄想の花々や鳥

たちのうごめきを

どこかのワタシタチから、生み出してきた力

初夏の明るい窓を確かめ

磨いたばかりの、あるいは、昨日の泥にまみれた

ままの靴を履いて

ワタシタチのひそかな裸足が踏む街の根の野放図

なひろがりは

街をいまだに揺らしながら伸びつづけ、浸食しつ

づけ、

無言で靴を磨き床を磨き鍋を磨き技を磨く今ここ

のワタシタチの

孤独な知恵をむすびつけ

弱々しい感情の束をパイプオルガンにして鳴らす

こともできる

それはワタシならぬワタシタチの、唯一の器官

根を通る力、根のひろがり

裸足の足は

靴の中、靴下の中ではひそかな裸足のワタシタチは

毎日、毎歩、接続と分断を繰り返している

根の上を歩き

根の力がワタシタチにも流れこむのを

思い出すとき

新しい花、新しい歌が、ワタシから

またひっそりとワタシタチへ、生まれでてくる

※ディラン・トマス「緑の導火線」、「フアン・ヒル」、  
セラフィヌ・ルイの生涯と絵画にも敬意をはらって

## 夕映え

以倉 絃平

散歩道できれいな夕映えに出遭うと  
何故か 亡くなったむすめの仕業だと  
立ち止まって見惚れていることがよくある  
せつせと掃除をしている姿が浮かんでくるのである  
夏至のころ

我が家の玄関に置いてある木椅子に座っていると  
焦げ茶の背もたれの 透かし彫りの隙間に  
飛来してきて止まったものがある  
ただいま となつかしいかすれ声が聞こえた気が  
して

よく見るとちいさな蛾であった  
木の椅子がなつかしかったのだろう  
検査入院する前のこと

書庫の片づけをする約束が果たせなくなったむす  
めは

パパごめんねといつて やせた体をかがめて  
この玄関先でいくつか本を束ねてくれたことがあ  
った

その頃はまだこの椅子は食堂にあったのである  
坐り慣れた椅子にはねをひろげて  
短夜を語り明かすつもりでいるのだろうか  
それとも 自然の樹と間違えただけかも知れない  
それならば夜露も呑めなくて困るだろう  
庭の茂みに移すべし そう思って  
そつと指先で摘まもうとしたら

はねにさわったか やみにさわったか  
夕闇にまぎれて飛んで行ってしまった  
もうひとではないのだから仕方がない  
それにしてもよくぞ帰って来てくれたものだ  
本能がかすかに記憶しているのだろう

美しい蝶になってこの世に帰りたいというひとが  
あれば  
どうぞ どうぞと譲るのがむすめであったし  
夕映えがきれいなようにと せつせと掃除をする  
のも

我がむすめの性格であった  
ひとはけの悲しみの如きものよ  
闇になじんで消えていく夕映えの如きものよ  
汝も然り、この世も然り  
ひと仕事終えたむすめは  
灯の入った食堂の木椅子に坐って  
家人と好きなビールでも飲んでいよう  
今夜もご機嫌だと思ってしまうのである

ととやみち (魚屋道)

井上 修子

ゆつくりねむった  
ゆうべのゆめみ  
ゆれてゆられて  
ゆられてゆれて  
このみちゆくとき  
ゆきどけちかい  
ゆうらりゆらり  
ゆらゆらゆらり  
ゆがみながらも  
ゆらりとつづく  
このみちゆられて  
ゆうやけみえぬ

ゆだんたいてき  
ゆのなかじごく  
ゆらゆらゆれる  
ゆげゆげしろい  
このみちゆのやど  
ゆけむりしろい  
ゆめみるおとと  
ゆつくりねむれ  
ゆられゆられて  
ゆきつくさきを  
まっかなおめめで  
みないでおくれ

\*つづく道 つなぐ道 つらぬく道  
六甲山を越えて 有馬まで  
海の幸を運び 山の幸を得る商い  
屈強な男たちに負けじと  
一家を支える若者は  
天秤棒かっいで一歩 また一歩と  
ひたすらに耐え 山道を踏みしめる  
おととよ いっしょに歩こうなあ

(神戸の民話 唐櫃道)

## 抜気のうた

いのうえ てつや

抜気はいつも空と対置している  
抜気が煙をはき出していたとき  
囲炉裏は ずしりすわっていた  
横座も 縦座も 鍋座もあった  
前線が近づくと  
煙は家いっぱいに澱み  
目を真赤に充血させ  
畚を持つ手で涙をふかせた  
しかし  
家族の語りは絶えなかった  
牛をはぐくむ鍋が  
春を呼ぶ歌をうたった

今

煙はない  
鍋座のむしろが一番うまかった  
「天明」生まれの伝説も消えた  
そして  
テレビ エアコン インターネット……  
ラインが網のように這う  
座敷からも壁からも天井からも  
人間が消えていく  
そこには  
明日も  
冬の気配が抜気から降りてくる

## 旅立ち

井之上 幸代

空と地平線に風は風を装い  
始まる暁光の柔らかく映えて  
大地に目覚める樹木たち草原たち  
充足する静寂の呼吸  
降り続いた雨の休息  
鉛色の雲を振りほどき終えたのは昨日  
天空に広がるコバルト色のカンバス  
仰ぎ見る人・人・人  
個々の描く思惑は推し量る術はなく  
混じり合い交錯する思考の広がり  
夢幻に委ねて  
湧き上がる未来への希求  
人・人・人  
見えない彼方に向かう

## ドラキュラへの伝言

相方は無言のまま旅立った  
一人暮らしは五年の経過  
取り残された家の中  
気ままに規約なし  
無味乾燥無気力の境地  
無欲強欲を飛び越えて  
鳴長明如き仙人には程遠い体たらく

急ぎ足の秒針の刻む狭間を  
襲いくる侵入のかすかな気配  
施しの持ち合わせ無しを見透かし  
微力の抵抗の隙を突く  
何と哀れな世ではないか  
後期高齢の疲弊しきった  
血を求めに来るものよ  
どうだ おいしいか

新鮮とは言い難い  
ドロドロの細胞から  
絞り出された不良品だ  
だから  
保証付きの最低品なのだ  
だから

この世に呆れるほど  
途方に暮れるほど  
もう充分だよと  
悲鳴を上げたくなるに違いない  
後悔したって手遅れだって事よ  
永遠に  
安息の日の訪れは  
？  
だ



## 影

井口 幻太郎

落葉樹の枝が一斉に芽吹くころ  
裏山の雑木林を歩いていた  
たらの芽を探しに

尾根から浅い谷を見下ろす  
向こうの疎らな木々の斜面に  
僕の影が落ち  
足を止めれば 思案気に影も立ち止まる

影というものを意識したのはいつの頃だったろう  
気付けば 傍に座っていたり  
立っていたりする

親に貰った顔や  
ちんちくりんの容姿が好きになれないけれど

影だけは違った  
仲間と一緒にの時も  
仲間外れにされ 誰もいなくなった日暮れの里道  
足元から伸びる長い影が好きだった

今でも家路を辿る舗道  
街灯に照らされながら  
前になり後ろになってついてくる影  
心地良い疲労と倦怠と ちよつとした淋しさ  
お前を見れば 生きているのだと知る

こうして  
谷を隔てていても お前と僕は繋がっている  
何十年もそうして来た  
だあれもない 静かな山道  
一緒に たらの芽を見つけよう

## 蠟梅がこぼれ

猪谷 美知子

崖つぶちにひっそりと  
咲いている 蠟梅

こぼれ花

寒風と大空の下で  
香りは散乱する

ハンカチに拾い上げ  
玄関へ

馥郁とした

濃厚な自己主張が  
狭い空間に満ちて

ここを居場所

と 定めても良いか  
小さな器に

あふれんばかりの  
黄色い口元たちが  
聞いてくる

私の息は濁っている

吸って吐いて

応えることなど  
とても

こぼれ落ち

拾われ

張られた水の中で

見る見るうちに

退色

腐色

崖つぶちの枝に  
しがみ付いている  
蠟梅は 今

## 咲友さとの髪かみの毛け

今村 欣史

咲友の髪かみの毛けは美しいなあ  
それはそれは見事な  
黒々としたストレートヘアー  
腰まで伸びて  
まるで百人一首の詠み札だ  
頭の上に巻き上げて  
結むすった髪形かみかたちもかわいいなあ。

それを咲友はバツサリと切きってしまった  
病やま気で髪かみの毛けを無くなくした子どもこどものためにと  
咲友さとはそのために伸ばのばしてきたのだった。

お風呂ふろと一緒に入いって洗あって洗あった髪かみの毛け  
ジイぢいの皺しわだらけの手てで洗あって洗あった髪かみの毛け  
咲友さとよ

お前は目めをつむり  
気持きもち良さそうに委まねていた  
その髪かみの毛けを惜おししげもなく。

ジイぢいは思おもわず  
「かわいい子この役やくに立たったらいいな」  
と言いってしままった  
ところが咲友さとよ お前は  
「そうは思おもわない」  
と即座しやくざに言いった  
「だれでもいいから喜よろこんでもらえたらいい」  
と。

咲友さと 八歳はちさいの夏なつのこと。

## 青いねずみ、十字に走る

入江田 吉仁

青いねずみ色  
しかし、明るい  
昼夜のように もやが通りすぎる  
色の濃いところは暗い  
暗くて かきわけて そのものは進む  
もえるガスの色の向こうは  
ぼーぼー山  
十六夜月を背後に隠して  
隠した月に照らされた雲が  
赤ねずみに凄む  
火と炎は金色に熾っている  
具象のねずみは  
走り抜けた  
その2、3の像が残像になった  
ねずみ色の残像

ふりむけば 初恋  
視れば ねずみ蔵  
画用紙に斜めに走り去る  
具象の直線斜線が  
ひりひりと  
指をいためる

## 池の畔で

岩井 八重美

光のそそぐ  
向こう岸を駆ける人は  
わずかな崩れも見せず  
木の下闇に  
ふいに姿を消す  
  
やがて池をまわって  
私の前を駆けていくだろう  
響いてくる鼓動を  
数えて待つ  
二十一年目の朝

## エレベーター

走りこんでくる気配に  
とっさに「開く」ボタンを  
押して待つ  
あれ？  
誰も乗ってこない  
同乗者たちの  
怪訝そうなまなざしに  
あわてて「閉まる」を押し  
箱は上がっていく  
あの気配は  
もう追ってはこない  
これは安堵か  
落胆なのか  
測りかねて

## 大坂の陣

岩崎 英世

無名の幸村が

真田丸を築いて

激突した大坂の陣

幸村の戦跡を歩いた

真田丸は

大坂冬の陣において

大坂城南惣構に築いた出丸

南北約二二〇メートル

東西約一八〇メートルの半円形

真田丸顕彰碑が

大阪明星学園グラウンド脇に

平成二八年二月一日設置された

すぐ前の心眼寺は

幸村と大助の供養のため

建立された

門扉には六文銭がついている

三光神社

采配を掲げる幸村像

大坂城へ通じる地下道とも伝わる

「真田の抜け穴」がある

円珠庵（鎌八幡）

幸村が鎌を打ち込んで

戦勝祈願

見事に大勝を収めた

茶臼山

冬の陣では家康の本陣

夏の陣では幸村の本陣

茶臼山史跡碑の多くの波形は

群雄割拠を

大きな円形は

天下泰平の世を表す

一心寺

山門には格闘士を思わせる

五メートルの仁王

天王寺口合戦の痕跡が多く

両軍対峙の最前線

霧降りの松

幸村に追い詰められた

家康が隠れると

突然松から霧が吹き出て

一命をとりとめたとか

断酒祈願の墓

東軍先鋒で奮闘戦死した

本多忠朝

深酒の所為と言われる

存車堂

大坂の陣歴史散策案内所

拡大した

大坂夏の陣図屏風に

朱の幟、赤の具足と指物

黒塗りの大鹿角兜をかぶり

栗毛にまたがって采配する幸村が

安居神社

境内で越前松平隊の足軽に

槍で突かれ戦死

享年四九歳

二代目さなだ松

真田幸村戦死跡碑

幸村像がある

戦国時代最大にして

最後の大合戦

天王寺・岡山の戦いに

想いを馳せる

霧の朝 — 砂丘より —

岩崎 風子

この海のむこうに何があるかと  
海のこちらからみつめていた日々

砂は霧にぬれて  
転がり落ちたわかい日  
芽ぶいてくる思いを  
陽にしなう菜のように束ねて  
一人の夜は明けた

ふくらむことばが満ちていくなかで  
果実は熟し 風をうけ小舟はそのままに滑っていく  
時を経て  
帆は終日何かを注ぎ込まれ  
ついに ひとつの名前を見つける  
岬

わたしの前に波立ち広がる岬  
爆ぜる光

さぐるような銀の水  
まぶしさにその名前を呼ぶと  
小舟は絶えず漂い  
雲翳は雫を滴らせる

霧の朝  
波に碎かれる起伏の中で  
なつかしい名を取りもどそうと  
忘れっぽい風が 岬をまわる  
大きな羽を持つ鳥よりも音をたてて  
何もかも丸はだかにして  
わたしを目覚めさす

## 水の帽子をかぶると

植村 孝

水の野球帽子をかぶると  
何だかメジャーリーガーになったようで  
ニューヨークのヤンキースタジアムで  
相手チームの打者から  
バットバットの三振の山を築き  
ノーヒットノーランを達成し  
ピンクがかった鋼鉄のリングの気分になれるよ

水の鳥打ち帽子をかぶると  
何だか画家のダリのような気分になって  
大きなキャンバスに向かって  
砂漠に緑の絵の具を塗るだけで  
たちまち緑化したゴビ砂漠が地図上に出現する  
画家のような気分になれるよ

水のベレー帽をかぶると  
何だか手塚治虫になったようで  
鉄腕アトムのように  
宇宙を飛び回り  
弱きを助け悪をやっつける  
愉快的焼き芋のような気分になれるよ

## 駐車場で眠っていると

今日は昨夜眠り水を飲んで寝たにもかかわらず  
朝ちゃんと起きられなかった  
眠り水の効果なんて実際はないのだ  
ただ気分の問題だ  
もう飲むのを止めようかと思いつながら  
ジムに向かっていた  
三分の二ほど来たところで猛烈な眠気がして  
近くの食品スーパーの駐車場にクルマを止めて  
眠ることにした  
いつもの時間にジムには行けないが  
しようがないと諦めて  
座席を倒して眠った  
眠っているのにジムに向かって  
走っている夢を見ていた  
そして気が遠くなっていた

よく寝たと思いつ計を見ると  
十分ほど眠っていた  
気分もスッキリしてクルマのエンジンを掛け  
いざジムに向かおうとして  
辺りを見渡せば駐車場は駐車場だが  
ここはジムの駐車場だ  
おかしいな  
ほくは食品スーパーの駐車場で仮眠を取ったはずだ  
なのにジムの駐車場に止まっている



## レクイエムと誕生の交響詩 スクランブルするロードにて

内田 正美

昼下がりの にぎやかな街  
男・女・女学生・女女女・老人・恋人たち・女女  
街角で 若者が 美しい恋の詩を歌っている  
(ほんとうは悲しい別れの歌を……)  
むこうの角で 愛をこめた手作りの指輪を売る女  
細い指で髪を上げる モデイリアーニの女が目  
路上を影だけが通りすぎる

ひとりの男がイヤホンをして目をふせている  
交差点の音楽が聞こえて いっせいにわたりはじ  
める  
女・女女・男・学生・女・老女・男・男男  
赤や黄色の寄せてくる波のよう 踊る帽子  
ざわざわ ぱたぱた ざわざわ 赤い風船……  
いつの間にか やさしい交響曲 少しの破調

しずかな波紋のように入れかわる お互いの動線  
路上に影の幾何学模様が ながれていく  
爽やかな風の ちいさな挨拶も  
頭上には ぬけるような蒼い空がひろがっていて  
蒼はかぎりない血の傷みを隠すように輝いている  
目を細める光の裏側で  
埋もれる 我々のレクイエム

アッ！ ひとりぶつかった  
(それで始まる恋もあるかな)  
いや あるものか！ そんなもの  
光のレクイエム  
(それは脳髓の中にだけある まぼろしだよ)  
蒼い空が広がっていて 目をほそめている

幻のなかで 生まれ来る 無数のあわのような  
いのちの水は寄せている  
わたしの血の 上澄みも

蒼 空の色

人と影

赤ん坊の笑顔と 誰にもみとられずに去るいのち  
永劫さえも 今と取引する  
たしかなことは 光がふりそそいでいることだけ  
ひとりの女が目をふせて音楽だけを聞いている  
男・老人・女・女女・老女老女・男・女・女女女  
赤やグレーの寄せてくる波のよう 黒いステッキ  
ざわざわ波の交響詩  
波 波波 どこかでムンクの叫びの声  
まぎれていて 遠くでクラクション

みえない雨がふるなかを  
キラリ キラリ光る人の影がさえる  
行方しれずの友のように

空の蒼さにまぎれてしまう  
この路上で生まれて  
雑踏にのみこまれる  
おとことおんなの やさしい影

記憶が 下りてくる

やさしく光が わたしの未来を凍らせる  
わたしを盲目にする  
光から生まれて 光へ帰る  
さみしい魂  
槌音と 破壊のきしむ音  
古い祈りのことばと 未生のことばも  
はげしくクロスする 蔓草のように  
愛というまぼろしを抱こうとする  
光の裏で あるいは  
ふたしかなやわらかい 場所で

## 饒舌な海鞘

梅村 光明

海鞘は黙したまま  
二十一世紀の殻を外され  
儀礼的な刃物の技に  
解体が進む  
流れ去った時間  
あるいは形を成さなかった  
言葉の波長は  
ようやく求心力を得て  
味わいを増す  
矢継ぎ早の答えに  
問いは追いつけないまま  
酔えない麦酒の  
空き瓶が並ぶ  
地球ステイションの地下深く  
歓迎の宴は

砂時計のように親愛を増し  
生山葵が効く  
偽の酔いが美味さに絡み  
早く追いつきたいと  
追慕の海に漕ぎ出せば  
瞳の中の渚には  
あの時のきみに  
溺れたままの  
ぼくがいて  
カミユを再び  
語りたくなるが  
死の細部は  
語られないまま  
映像だけが届けられる  
夢に吞まれることへの

恐れから  
咽喉の奥に引っ掛かった  
ものを吐き出そうと  
咳き込む  
強く激しく  
繰り返すが  
嘘はまだ吐けないでいる

## 草地

江口 節

歯が歩く  
眼が泳ぐ  
耳は居眠り  
蝶番は幾千万回閉じて開いてすり減る一方  
森は とうに消えた  
林に ところどころ草地があり  
まっすぐ見上げる空だ  
空の奥から  
涼しい風が吹いてくる  
木木の葉は  
無数の風を受ける  
くぬぎの葉 こぶしの葉 ほだいじゅの葉  
それぞれの葉にそれぞれの風  
翻ることの葉を並べて ことばに  
行き着くだろうか

行き着いただろうか  
行き着こうと  
字も知らぬまま音韻を指折り数え  
トメ・ハネを意識しつつ鉛筆を握り  
今は キーボードを叩く  
指先を滑ったキーが  
未知のことばを見せる  
未知は未地 未踏の地  
踏み入るには膝が笑う  
背骨がうたう  
吹き来る風が葉を翻し  
しずかな草地のくさいきれ  
ちらちら木漏れ日に埋もれてそのまま  
瞑りたい

## そんな気がする

大石 玉子

年を重ねるって  
心が成長していることかもしれない  
身体は全く成長しなくて  
段々に 後退しているようだけれど  
心の方は  
成長しているのかもしれない

昨日と今日は  
ほとんど変わらないように思うけれど  
二年前と今だったら  
どうだろう  
少し違って来ている  
十年前と今だったら  
かなり違って来ている

どうして? と考えてみると  
過ごして来た経験しか思いつかない  
ある時 ある人に出会ったこと  
ある時 ある本を読んだこと  
異なった学び 心が動くひととき  
考えさせられる時間は  
年齢と共に増えている

ため息をついたり  
涙ぐんだり  
ちよっと落ち込んでいる時も  
心は成長している  
そんな気がする

## 果て無し山脈に広がる虚数空間

大賀 二郎

紀伊山中に密教の秘境がある 重畳とした森林が東に切れて そこに果て無し山脈の空白が広がる 田畑も村落も一切が疎遠になる この地で かつて最後のニホンオオカミが果てた その現地を訪れたことがある

太平洋戦争も末期であった 山口県周南市の孤島大津島から人間魚雷回天が飛び立った 百人を超えた中には民間人が含まれていた 遠く紀伊の果て無し山脈からひそかに一名の若者が参加していた その者も大津島で果てた 原子爆弾が投下されたのは それから日はなかった

自分自身 無心に日が過ぎて 残りはずかになっていた 数年前にいた 生まれずに 魚雷発射された現地にたたずむ 湾内を一望する山頂に記念館が出来ていた 人間魚雷とその狭小な空間 全員の写真と遺品 紀伊の果無し山脈からこの地で果てた若者もいた 無心であった

帰路の山中はおびただしい時間が堆積していた ルイスハンミョウという

凶暴な牙の昆虫の群れが沢蟹に食いついていた 昆虫世界も環境に反応する 近年 自然災害が多発している 渦巻 津波などの想定外の事変が起きて いる

ある会合で 果て無し山脈の近くに住んでいるという 人間魚雷で果てた人を知っている 遺族はひっそり暮らしている 語ることはない

一連の事実はどこかで繋がる 虚数という感知できない数理がある 空間と時間に存在する

## 一步前に

大西 隆志

ドアノブを回して外に出る  
N極からS極にジャンプするように  
冬から夏に移る一步  
センサーが反応して通路が開かれる  
ちよっとしたこと  
茶柱が立つ、山が立つ、高圧線の鉄塔が立つ  
足を踏み出すと空気が変わり  
映画館ビルディングの解体のホコリに細胞が泡立つ  
鼻を押さえる、胸を支える  
重機は動いていない、作業員もいない  
小さな虹も描かれない  
遠くで声、がかすみ  
知らない言葉の世界があらわれる  
焼跡の匂いに、ヒトの声が重なる  
ダンテがペンを握っているのか、後姿が一瞬だけ

浮かび上がり、定着しない伝説がつうじ  
りかいの変電所が地下の空洞に埋められている  
二項対立に駒が進んでいく  
お菓子と茶柱がりかいを再定義してくれる  
ペラペラの膜のむこう側に  
あのこの花が咲く  
うるわしき夜に薄明かりが地面を照らす  
樹を倒し、乾かすのは時間をためこんだ年輪  
削り取られたのは規格にあった物のみ  
われらの時代は物があふれ  
あらゆる柱は建てられるのだが  
物が物としてではなく  
印字される前に腹が膨れ  
飢餓が世界の隅々に拡がっていく  
水で酔え、麻薬なしで旅をする

わたしたちの祖々父は消えたのか  
煙が消えかかり、ことばも頼りなく消えかかり  
消えかかるとのこと  
韻を踏んで、泣きわめいて  
口からことばを投げだす  
下手なピッチャーのように  
下手投げであちらへ

## なにも聴こえない

大橋 愛由等

土を掘るとそこに祖父の耳があった

「聴いていたの」「聴いていたよ」が同時に交わされていた。ずっとここでぼくを待っていたのか。「きみもタコの刺し身が好きなんだね」と親しげに語りかけてくる。祖父のげじげじ眉はぼくにも遺伝していることを想い出す。「ワシの評判は善くないみたいだ」。たくましく生き抜いた明治男だったともいえる。悪ぶれている風でもない。かすかな記憶をたどる。生まれたばかりのぼくをだきあげたその体温。

耳をながめていると「ともかくきみの部屋へ」。ギリシア悲劇全集の横に祖父を置く。なにを語ればいいのか。そしてなにが聴きたいのだろうか。夜が白くすぎてゆく。いくつかといくつかの時間が過ぎていった。「ワシのそばにアンティゴネはいなかった」とぼつりと云う。いつのまにかソフォクレスを聴いていたのか。どう応えていいのかわからないので黙ったままにしていた。耳がすこし動いている。

黒くなりかけた朝にベーラ・バルトークがみずからピアノ演奏している曲を流す。聴こえているだろうか。スタティックな無色の球形が部屋に転がりはじめ。巣を張らない小蜘蛛がダンスする。アポリネールのカリグラムのR<sub>g</sub>がすこしだけ曲がる。閉めきった部屋のなかでぼくのからだの微生物たちが螺旋しはじめていた。「アポリアでしか」。耳はそれを言ったきりなにもかたらない。祖父を怒らせたようだ。バルトークがまずかったのか。

気まづくなるぼくと耳。ゆるやかに移ろいゆく季節の音群れ、西風の声色をまねた南風の摩擦音、あるいはぼくのしじまを聴いてもらっているようか。でも耳はなにかを聴こうとしているはずだ。ぼくが少年時代に拾った石の話をはじめ。赤犬がさかんに匂いを嗅いでいたその石をぼくは拾い上げた。境界石にちょうど良い具合だと祖父がほめてくれた記憶。覚えているのか確かめようとする。耳はプラトン全集に向かっていた。

## お受け取りください

尾崎 美紀

せつかくですのどと  
遠慮がちな様子に  
一抹の不安を覚えたのがきっかけ  
それにしても  
私が日々 あなたにさし上げたもの  
それが迷惑だったなんて

それは たぶん  
贈る側の思い違い  
というか愛の重さとも  
愛、なんて言葉を使うのも面はゆいのですが  
そういえばそんな言葉もたくさん差し上げた記憶も

いつだったか 棺の中から  
ゆがんだ白い骨と共に  
パラパラと零れ落ちるたくさんの言葉が

紙ぶきのように舞うのを  
見たことがあります

で、どうされましたか？  
私の差し上げた精いっぱい厚意というか  
迷惑至極なものたちを  
いえ、今さらどうこうしようなんて  
思ってもいませんが

せめて 墓前にお花でもと  
ああ そうでした  
それも迷惑なこと  
死んでもから余計なものを背負うなんて  
でも せめてお受け取りください  
別れの挨拶はリボンなしで

はい さいなら、と



## 木の思い

和比古

何処に向かっているのか  
ゆかいな木が歩いている  
人間が望むように  
落ち着く場所を捜している  
小雨に内なる声が濡れる

これまでの時間を考えても  
長い道程だった  
ただ、もっと遠くへ行きたいと  
ずっと思っていた  
今ひと息つき休みをとりたい

風もないのに  
葉が揺れている  
背伸びをすることで

幹が動いているのか  
再び蒼い空が拡がる

四季のうつろいに合わせて  
木々は話し合いをする  
どんな花の色で笑顔をみせようかと  
暖かくなり少し進んでも汗をかく  
風がそつとささやく

寓意でまた歩き出す  
木の自画像が映る  
名もない神社の小川  
自然にまかせ流れていく  
遠近法を必要としない構図

## トクサ

かただ  
ときこ

過ぎ行く日月に  
緑の節をたて  
ものごとのくぎれめや  
心がとまるような時も  
ひとりひとり真つ直ぐ爽やかに  
すつくと立って成長の  
あしがかりとなる節をみせる子たちは  
しろい空へぬける幻  
子どもとともに育つ幻想が  
そんな時でも土の下では  
どこまでも地中ふかく足をひろげ  
となり 前 後ろへ  
くまなくからむ共生に  
木賊のような地球人は濃霧の中  
すぐそこに  
子どもに似たロボットが

## 花散る里

あざやかな四季の花と  
緑の樹木にかこまれた門のなか  
毎日さまざまな人の笑い声がきこえ  
にぎわう玄関さきに  
屋根にとどかんばかりの  
大木三本 春がくれば  
米粒よりも小さい白い花がびっしり  
「花散る里」が風に舞い 雪をかぶるように  
埋まる庭 きょうもお年寄りが  
楽しいデイサービスに  
それぞれ好みのお茶を飲み  
しみり聞きあっている

## アオキさん

神尾 和寿

アオキさんが  
まだ来ない  
イノウエさんなら  
三年前から来ている  
ドラム缶にまたがってたばこを吸っている  
美味そうだ  
イヌのウエダ君と  
サルのエグチ君に声をかければ  
けんかの最中だ かみつかれてひっつかかれて  
すごく痛いのもかもしれない  
アオキさんだけが いつになっても  
来ない  
はじまらない

## 地獄の日々

針の山がそびえ立っている  
血の池が煮えたぎっている  
午前中は散策をし  
午後に入湯する  
いずれの時間帯にしても  
とても痛い  
生きているときに人非人であった者たちの  
死体には  
神経線維が残る ということ  
死んでからはじめて認識したことの内  
ひとつだ

## ゴクラク、ゴクラク、

極楽にはだれだつて行けるのだから という  
わけで  
ほくもきみたちも  
よだれを垂らして  
この蓮の池のほとりにて膝を突き合わせているのに  
あいつひとりだけがいない  
何かにつけて平均的な  
あいつだったのに  
なぜか と  
そこで理由を尋ねてしまったりするようでは  
極楽では  
やっつけていけません

## 初恋のひと

未来が少なくなっていくにつれ  
過去は  
まるまると太って  
暖かくなっていく  
同窓会が待ち遠しくなる 完全に  
未来がなくなった 永遠なる欠席者の  
ニック・ネームが思い出せない  
何だったっけな  
何だったっけなと うんうん唸っているうちに  
現在のビールを飲み忘れる  
初恋のひとだったらしき人が 斜交いに坐っている  
それとなく観察すれば  
彼女もビールを飲んでいない

## 水の器

亀井 眞知子

町は大きな器  
涛涛と満たされた水で  
じょうずに泳ぎ  
コンクリートのジャングルをめぐり  
やがて ユートピアを  
街に住む人は そう信じて泳いだ  
小難しい表情で立つ建物は  
朝 手を広げ人を迎え  
夕は 同じ手で人を追い払う  
オレンジ色に染められた街  
小さな一步を重ね  
遠い遠い家路に帰る  
毎日のくりかえし

コンクリートの壁の  
色鮮やかなキノコのような看板の微笑に誘われ  
ふと、不夜城に迷い込む  
城の扉は 貝のような口をあけ  
夜に  
どこからか流れてきた男と女を吸うては吐き  
歌い 笑い 呑み  
快樂の美水に酔わせる  
と  
土の記憶も 森の記憶も  
鬱蒼とした街に葬られる  
涛涛と零れおちた水  
大地の沈黙の中をたどり  
想いの深い海を越え  
生ある所にたどり着いたとき  
深い呼吸にあふれる水の器  
襲襲と 襲襲と

# 松毬

香山 雅代

信者でない者(わたし)の声も 混じって 聴こえる

## (1) 少女胚胎

少女は 書かない  
大いなる沈黙のなか  
ことばのなかで であう  
眠りのうちに 在る

揺らぐ

水面に 三千丈の黒髪を 靡かせている時空  
六十兆個ヒトDNAの領巾 龍宮の乙姫の元結の  
切端が絡まる深海の泡沫  
沈黙の野に 蹲るように咲き乱れる青い花  
古代の影を宿す大樹の切り株  
点滅しはじめる幾星霜 霧の涯

蟻の歩みかと みまがわれる楽譜の出現  
作曲者 高田三郎直筆(書き下ろし)  
『イザヤの預言』が甦り 点滅をはじめ

マリア大聖堂に 満ちる  
祈りのことば

語るように 歌うように  
地を 這うような 眩き  
典礼の 息吹 五臓六腑の 氣息  
祈りの 共時態にいる 少女  
何故に 少女  
わたしは 書かない

唐突に 顕われる  
輪郭をもたない 大いなるもの  
想像力の 胚胎 少女胚胎

longleaf pine 大王松の原木 その松毬が転がり  
出ようとすると 音域にいる

乾いた  
大いなる眠りのなか 内包する刻を 潜め  
母の胎内に 在って 鳴動する

風の 髓に 心音を 奏でる

夜が 明ける

## (2) 鳴動

青海原に  
鳴動する

活火山の影を 宿し  
海より 大地より 轟く炎

風月を 移ろい  
遙か 霧の大地より いつの日にか  
この地に 運ばれ来て 根づく  
風に 揺れる 大王松  
松の根方の ながい枯敷松葉に 霜を置く日  
おおきな松毬が いのちを潜めて 転がり

手渡される 三十センチ余りの雲客 無明の言霊か  
手渡される ひとつの松毬に この地球の

いく萬の 形見の 遺言

鳴動する いく億の 種子  
希みの舟を 象る空に  
抽象の權が 手渡されるのは

手から 土へ 水の恵みを いただき  
芽から 若木へ 幹へと 土は育み  
幾星霜を 陽光象る いのちのオールで  
葉を繁らせ 風雪を蓄え  
故郷 武庫の河岸に 刻みつけ  
花を 咲かせる

祈りの 種子  
無何有へ 背後へ 深みへと  
眩くほどに  
葉を揺らし  
樹齢を 刻みつづける

大王松の松毬の  
未知の旅は  
夜明けとともに  
はじまったばかりだ

## ジグムント・フロイトの帽子

彼末 れい子

フロイトは子ども達をひきつれてよく キノコ狩りに出かけたが前もって入念な下調べをしてキノコの生えている場所にしか行かなかった森に着くと  
ちいさな者たちに言い聞かせたおしゃべりは絶対にしてはいけない袋は丸めて脇の下に隠しなさいキノコに気づかれないように

子ども達が散っていった森の中ゆっくり歩を進めていたフロイトはやがて 一本のキノコに近寄り蝶を捕まえるように自分の帽子をかぶせたいつも被っている灰緑色のペロアの帽子幅広の絹リボンが巻いてあるオーストリアン・ハット

それから  
チョッキのポケットに入れている銀色の笛を取り出し  
ピーッと吹いた  
子ども達は息せき切って帽子の周りに駆けつけた  
みんなの視線がそそがれる中  
フロイトはおもむろに帽子を持ち上げた  
小太りのシュタインピルツ（ヤマドリタケ）が捕獲されていた

りっぱなキノコを採取した子どもには白銅貨を与えるのが常だったが一番美しいりっぱなキノコはいつも 自分の帽子の下にあったそれがフロイトの神聖な儀式にも似たキノコ狩りの筋書きだった

## 双魚

川田 あひる

点滴注射針を抜かれ  
夢のような  
未来時間の乱道を  
線香が一本足りない！  
ご先祖さまの  
悲鳴を  
バトンされ買いに走る  
シューズが硬く重く  
難渋したが  
線香は間に合った  
激しい陣痛に  
もう浣腸の間もない  
いきなり分娩室の真実世界へ突入した  
出産は  
排泄と  
同時に

ああ、あなたの瞳を一瞬閉じてください  
雨上がりの  
滝を昇る  
双魚  
が見えるでしょう  
故郷の骨董屋のちいさな皿に描かれた  
青い  
命の  
歎びを  
聴きましたか  
さあ、目をあけて  
縄を絞りあげた  
大昔の大仕事あとの  
美しい声が  
響きわたり  
一卵性双生児の臍の緒を切断する光景が  
飛び込んでくる  
まぶしい  
五月晴れの朝に。

## ホテルで

神田 さよ

真夜中

壁を越えて

連続音

床を踏んでいるみたいだ

不愉快な不明

壁に穴

みつからない

暗い部屋

穴があくほど見つめる

音はますます早くなる

ラジオの音量を大きくして隣りにも聞こえるようにした

床音は鳴りやまずさらに速度を増し行進しているようだ

繰り返す幾何学模様

闇のなかの抽象のヴォイス

朝食に行こうと廊下に出る

もう隣の部屋のドアは開いて

だれもいない部屋に

古びた軍靴

こびりついた黒い泥

あの日は雨だったのか

ゲートルが床にだらんと落ちている

鼓膜が

震える

快晴の日の

警告



午後のみなもに撃ちこまれるは光の銃弾  
波はひとつひとつきらめき  
陽光と照りかえしにブリッジは焼けつく  
甲板におどる海水をあびながら  
船が家をのせ家財道具をのせ  
へりぎりぎりまでしずみ波を分けるよ  
瀬戸内をぬけ長崎 種子島に寄り  
とおいところ 越南でもシヤムでもない  
とおいところへ生まれるまえの記憶さがして

船よ あえいで進んでもさがすものはない  
みなもをうごきうつつをなでさするだけ  
この世を生きようと水平移動するだけ  
欺きのマスクをはぎとれないから――  
おまえは嘘をつくわけではないけれど  
いうことなすことすべてがやはり嘘

うちにかくしごとをひめている  
服を着けても透明でかくしだてせぬ人

そんな人になりたいとねがつても  
秘密ゆえにそうなれずみなもをさすらう  
まばゆい波を分けしずみそうになり  
しんどそうにきしみながら播磨灘を  
幽霊に追われ幽霊のようにさまよう  
家も家財道具もすてきれず  
真心さらけだせなかつた悔いを心にため  
波をかぶりまだ借金をかさねるのか

船はおもいおもい図体をひきずり  
小豆島のあわい影にすいこまれる

まんまる虹

青い空からふるえる光  
光をあびちいさな葉がちりちりゆれ  
レモンの枝もそよかぜにさわぎ  
ヒバリはあがるよあがる雲までとどく  
つめたくぬれ くらいくらいとつきぬけた雲  
そんなことはきれいにわすれ  
かぜにあおられ青空に  
たかくはばたき明るくさええずるよ  
下にひろがるはまっしろな雲  
まんまる虹を色鉛筆で描いたようだよ  
雲にできる虹  
まんまる虹の そのまんまかに  
おどるはヒバリの陰か  
おどるよおどる右に左に

陰につられて虹もおどるよ  
上に下に――それがうれしい

陽のいたずらにさえずりうれし  
空 雲 虹が春をよるこび  
レモンの木も我をわすれ  
雲をよるこび 空をよるこぶ  
ヒバリが背負うはまんまるな虹  
さえずりはレモンの木によるこびそそぎ  
天の使いによるこびをおくる  
あなたは虹を背負って生まれた  
あなたもレモンの木やヒバリや天使に  
よるこびをおくっているのだ  
有ることをよるこび天の香気をよるこぼう

## 冴子の世界

北川 清仁

冴子の世界はちょうど半日ほどもあれば  
路地の隅々まで歩けるような街ぐらいの大きさで  
しかも いつも夏だ

それは なせかといえは  
冴子が麦藁帽子かぶって歩いており  
また どこからか蟬の声が聞こえるからだ

夏の日  
冴子は 屈託がなく  
子供のように僕の手をはなさない

しかし 冴子の世界は  
ほんとうはもっと大きくて  
見えない冷たい野がどこまでも広がっている

冴子がときどき 目を細め  
遠くを訝るようなしぐさをするのは  
その野の上を大きな雲が流れ  
野が翳るかららしい

冴子はたまにその野にはいつていつてしまふ

そんなとき僕はひとり夕闇にとり残されて  
冴子が帰ってくるのをじっと待つのだ

## 細い月

北野 和博

列車の隣のシートに  
兄が座っている  
さつき母の病室で  
またねと別れてきたのに  
しゃべらなくなった母に聞かせたくて  
子供のころの思い出を  
いっぱいふたりで話してきたのに  
それでも  
黙って雑誌に目を落としている横顔は  
兄としか見えない  
並んで列車に揺られていると  
病室で会ったことが  
幻のように思えてくる  
さつきは話さなかったこと  
兄と旅行した遠い夏休み

こんな風に列車に揺られて  
話そうか  
どうしよう  
僕は窓の外に目を遣った  
さつきまで満月だったのに  
糸のように月は痩せて  
僕たちについてくる

## ウサギ

病室のカーテンの向こうで  
雪は降り続けているようだ  
ちかごろ夜に眠らない母は  
朝からずっと眠っている

いまはまだ  
いっそう重たい雲が  
空地を包んで  
あたりには  
誰もいない

真っ白な空地に  
女の子がひとり  
重たい雲をつりさげた空から  
雪はたえまなく降りてくる  
女の子は母だ  
ちいさな手で  
雪を固めている  
もうすぐ急に陽が射して  
ウサギが溶け  
母は泣き出すのだが

## 垢をもって垢を落とす

季村 敏夫

脳天めがけ、ポタリ。つづげさま、ポタリ。  
なんだこれは、だれのシグナル。

ホーチミン市の夜のバー。流し目のねえさんをふりきりふりおとし、  
人の世に交わること銭湯に入るがごとし、寝とぼけ先生に語った源内のひとことに誘われ、  
カツウノリ・タアキと入った、いかがわしい垢すり屋。

社長さあん、現れ出た巨漢の男。いきなり部屋のスイッチを切る。  
暗闇のなか羽交い締めになれ、ぼいと投げすてられて灯りがともされる。  
見上げれば、はげ頭の怪人、ニヤリ社長さあん、

その声を浴びるや否や、気合いの唾とともに荒塩を吹きつけられる。  
垢をもって垢を落としかかり湯をして外に出でるとき誰の身も清浄なり。  
寝とぼけ先生はこうも続けていたが、  
汚れをもって汚れを落とす、この激しさはどういうことだ。

容赦なく正確に、男は石のごとき硬いものをあてがい、わが身をこすりつづける。  
ううっ痛いどころではない。痺れゆくこの感覚の果て、  
後悔の念などあつという間に吹っ飛ぶ。  
するとなんたる事態、股間にましますわが一物は小さくさらに小さく、

腹のなかへめりこむように縮みあがり、そよとも動かなくなり、  
ニヤリ、ひん曲がった男のまなざしをまともに浴びる。  
なんたる実態、これが人の世に交わる、わが姿なのか。

はやくお戻り、呼びかけてくるカラス一匹カケス一匹、ここにはいない。  
さきほどの流し目のねえさんをおもいだし窓から逃れゆく湯けむりを恨めしく追っていると、  
社長さあん、どうですかと荒々しい両手の動き。  
こは即ち垢をもって垢を落とす南国の作法なり。

脳天めがけ、ポタリ。またしても、ポタリ。

〔木端微塵〕所収。ただし改稿

## 南洋の木鉢

工藤 恵美子

戦場となった島

テニアン島に生まれた証のように

居間に飾ってあった 南洋の木鉢が残る

太い鉄木を剥り抜いたもの

ひと抱えはある舟形 重さ五キログラム

側面いっぱい描かれた

パラオの神話伝説

戦後七十余を経る

ギブダル島の老婆神ヘツブソングルの家の前に大樹のムヅー（パンの木）があり、木の中が洞になっていた。其の洞から海の潮が吹き上げ魚が木の枝から降って落ちた。ヘツブソングルは毎日居ながらにして魚を食べていた。村の者が妬んでパンの木を切り倒した。すると、海の潮が吹き上げて

吹き上げて、ギブダル島は海の中に沈んでしまった。

（ギブダル島の神話伝説 土方久功著）

パンの木に生る

赤い魚の絵を指し示しながら

話してくれた父の影

ひきこまれて聞いた

十歳のわたしと 七歳の妹

思い出せない物語を探し続けていた

テニアン島へ何度目かの慰霊の旅で知り合った

パラオ大学の先生から教えていただいた

——パンの木に魚が上ってくる話はギブダル島の話以外はない。パラオのルバック（老人）達

の証言から判りました。と

ルバックによつて

今でも 語り継がれている神話伝説

一枝一枝に魚が生るパンの木

南洋の木鉢に描かれた

赤色のユーモラスな魚 残り続ける鮮やかな色彩

海へ沈んで行ったギブダル島

私を惹き付ける

南の島

\*ギブダル島—パラオ諸島のハベルダウブ本島オギワ  
ルから四マイル沖にあった。

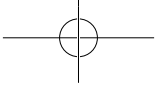
春

黒住 考子

広野を舐めるように遡ってきて  
見ている眼から溢れだし  
眼を閉じることなど出来なくて  
見えないけれど  
見る

### 蟬しぐれ

物を思いながら歩いていた  
気づくと蟬しぐれの只中にいた  
包まれながら耳を澄ます  
無数の蟬のひとつひとつの声の  
重なりよじれていく空間  
私の意識は蟬のひとつひとつの声に縋い合わされて  
夏の午後の青空へ放り出されていく  
夜も遅く  
蟬の声を聞いていた  
突然はげしい羽音



窓辺の燈に誘われて  
ベランダの糸瓜の網に絡まってしまったらしい  
クエ ツクツクツク クエ  
もがく気配  
やがて 大きな羽撃きの音とチツチツチツという声  
夜の闇に逃げおおせたか

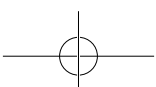
朝のベランダにその姿はなかった  
短い夏を生き延びたようだ  
またはげしい蟬しぐれ

生きているというのは  
こんな風でもあるか

### 冬苺

煮ごこった夢  
葉隠れに赤く

目印を見つけるように  
冬の森を歩いていく



## バナナ日和

黒田 ナオ

食べても食べても  
バナナを食べる  
ぼとりぼとりと  
落ちてくる

空っぽの  
青い空から落ちてくる  
何本 何本 何十本  
黄色いバナナが落ちてくる

わたしは待つ  
両腕を大きくひろげ  
ひとりぼっちで  
なあんにもしないで

酸っぱいわたしの胃袋の中は  
甘くて黄色い匂いで満ちる  
甘い匂いが口じゅうにひろがる  
甘い匂いが体じゅうにひろがる  
それからそれから  
空いっばいにひろがって

ぼとりぼとりと  
わたしが落ちる  
空っぽの  
青い空から落ちてくる  
何人 何人 何十人

ゆっくり空から落ちてきて  
だんだんわたしが  
遠くなる

## 蜥蜴と女性的姿態について

小杉 ヨウ

女性を眺めるのをもし禁止されたら  
と想像したことがある。

理由は、

「いやらしいから」

だそうである。

するとどうであろう。

蜥蜴を捕獲して

ガラスケースの底の砂の上を歩かせて

その様子をじつと観察していることだろう。

何しろ曲線的な進行動作が大変艶めかしく、

ひよっとしたら飼育方法を学習するのも

悪いことではないと、

実際飼ってみようかと迷う。

日本に棲息している蜥蜴種はカラフルで

美しく、比較的飼育が難しい部類ではない。

禁欲的な動機が不純であるから

飼育をためらっているけれど

いざという時には飼ってみたいのである。

フライパンに食用油を曳く時の手の動きに

連動するフライパンのモーションが

蜥蜴の身をくねらせて前進する時の動作に

似通っているので、

食欲を伴った奇妙な性欲の衝動に突き動かされてしまう。

兎に角、その感情が人間的なものを超越した衝動であるので残酷な行為に走らないよう

警戒している。

原初的な宗教儀式のスタイルではなく、

飽くまでも美学的なカテゴリーの問題として考えてみてもおもしろい。

例えば、蜥蜴と女性の性的な姿態との間に

トポロジ的な同相は存在するのかもしれない問題。

あるいは神話で女性と蜥蜴との出自についての関連性が認められる史料があるのかという問題。  
これらのような問題が今後の課題なのである。



## 昼の月

小西 民子

詩を  
読んでいると  
詩の  
世界に  
つまれる  
動物園は  
木々に囲まれ  
春には  
必ず 花が咲く  
朝  
鳥の名前を  
おぼえて  
空色の空  
の中の  
藤の花

桐の花  
秋には  
あけびとり  
ぎんなんとり  
秋の雲  
どこまでも  
鳥も  
飛んでいる  
書店には  
詩集がいっぱい  
世界の半分は  
いたい  
くもの巣を  
じっと  
見る

たんぽぽの  
綿毛を  
じっと  
見る  
ぼく  
いま生きてる？  
白い紙を  
ひろげると  
雪の日の  
ようだ  
計画に  
満ちている  
昼の月  
詩人よ  
さようなら  
花々に  
もぐりこむ  
花むぐり

うめてゆく  
うめつくす  
あふれ  
はじめる  
こぼれてしまう  
空には  
消えかかった  
ひこうき雲  
さいごの  
一行を  
書き  
はじめる

## 夕刊

小西 誠

夕陽を  
背負った  
影が  
通りすぎて  
冷たい風が  
頬を叩く

コトン  
郵便受けの底に  
落ちた  
言葉の破片

脳裏から  
飛翔しない  
頑迷な

語彙が

鼎の  
議場で  
丁々発止  
野次礫飛び

サイコロ振り  
凶の目が  
吉にすり替わる  
不思議

遠くで  
重い車輪が  
軋む音

## 夜の闖入者

### (一) ゴキブリ

しゃがんで動けぬ俺の視線をかいぐぐり  
サツと横切ったもの  
速い すばしっこい  
茶褐色のステルス性  
ここには国境線はないが  
見過ごすわけにはいかぬ

硝煙の匂いのする薬剤を撒く  
漂う不穏な気配

### (二) ナメクジ

ぬるり足裏に触れたもの  
暗い闇の中でも  
伸ばせるだけ伸ばした軟体の匍匐  
戸締りは完璧な筈だったがこれだ  
粘着質の軌跡を残して微かに光っているが  
得体はしれず

——お友達を紹介してください  
ある夜消しきれないメールが殺到する

## おとぎ話

今 猿人

狼は狼少年と大の仲良し  
血の同盟で固く固く結ばれている  
だって そうだろう？  
狼がいるから  
少年は大威張りで嘘の吐き放題！

「くるよ くるよ きつとくるよ」

ミサイル発射誤射着弾領土侵犯スクランブル発進偶発接触闘行為戦争勃発  
徴兵復活赤紙乱発戦死者骨々市街地空襲焼死者炎々民族紛争大量破壊兵器マ  
スタードガス難民流出無差別テロ自爆テロサイバーテロ核テロ被爆者多数原  
発テロ炉心溶融放射能飛散死の灰散布被曝地漫々

「くるよ くるよ きつとくるよ」

南海トラフ大地震家屋倒壊大津波家屋流失火山噴火溶岩流大火災森林火災死  
屍累々地球温暖化北極氷山溶解生態系破壊異常気象ゲリラ豪雨竜巻突風巨大  
サイクロンハリケーン台風土石流地球砂漠化少雨熱風大旱魃大飢饉餓  
死者山積新型ウイルス耐性菌奇病蔓延氣息奄々死者続々異臭芬々

「くるよ くるよ きつとくるよ」

国家財政破綻大恐慌国家漂流銀行閉鎖年金停止格差拡大貧困死難民流入世情  
騒然言論暴圧暴虐虐殺暴徒暴動凶悪事件横行少年犯罪累犯蜿々学校崩壊スト  
リートチルドレン超高齢社会老々介護介護心中家庭崩壊孤独死満々AI不況  
人間疎外AI殺人人間喪失！  
無血革命人民解放ユートピア到来！自由平等博愛ラブ&ピース……  
神のご加護？仏のお慈悲？無神論者の愉悦？

ふつうの幸せ

## 塔の上

佐伯 圭子

あの日 塔のてっぺんに昇った  
足もとは濃い霧がかかって懐かしい街が霞んで見えた

もう共に居て 温かいものを口に運ぶことは無いが  
夕空に煌めき始めた星を一つ二つと数えてみることは出来る

目の前に 塔の高みが見えたから  
昇りつめようとする意志が働いた

空に向かって昇っていくことは  
空の底へ落ちていくこと

もう暗い螺旋階段を昇ることも無い  
空に向かって立つ塔の上まで来たのだから

ちりぢりになることは 軽くなること  
宇宙の粒子になること

風だろうか わたしをここへ運び  
塔の上に押し上げたのは

押し上げられながら 汗して歩いた道のさまざまの  
匂いが立ち昇って来るのを知る 足もとまで

街の騒めきの隙間 少女らの声が  
まだ整わないままふくらんでいる

激しく揺れた街まちが 失ったものを抱えたまま  
光りながら放射状に 拡がっていく

## 都会の孤独

佐藤 勝太

都会では  
路地のような通りの中へ  
住んでいる人は多い  
通りの奥まで車も入る道で  
数戸の三階建二階建の家が  
肩を並べてそれぞれ  
特徴的に造られている  
が通りの近所付き合いは  
朝夕のあいさつさえ  
ほとんど無い住人たち  
どんな仕事をしているか  
お互い知らない間柄で  
数十年過している孤独

## 忘られないこと

その人は  
目が悪かったため  
元特攻隊員として生き残り  
いま九十三歳 影絵作家として  
当時の「光と影」を画き続けている  
せめて生き残った意義を尽そうと  
多くの友人・同僚が零戦で  
桜花を抱いて飛びたち  
青春の一枚一片を捧げた  
海岸に立ってその人は動くことが  
出来なかった

## 人生百歳時代

昭和の初めから戦中戦後の  
日本人の寿命は戦争で死も多く  
五十歳と言われた

## 蘇州夜曲の街

ある日中国蘇州へ旅して  
服部良一作曲の  
蘇州夜曲を聴いた

今回日本人の百歳以上人口は  
六万五千六百九十二人 内八十七%は女性  
百十六歳の女性は鹿児島喜界町に

河岸には中国服を着飾った  
若い女性が一人正座して  
歌って迎えてくれたが

男性では百十二歳で東京都に  
島根県には九千六百二十五人が健在  
平和の時代の人類は幸せで  
なくてはならない  
日々を楽しく充実して  
それぞれ明日を生きて行きたい

蘇州の河は濁っており  
左右の建物も古く  
うらぶれていた

あの夜曲の音階は乱れていたが  
寧ろ旅情を感じさせて  
感傷的になった

思惟

佐土原 夏江

そこと  
ここと

確かにある  
きつとある  
そこ  
ここ

しばらくは  
しばらくは  
そこで  
ここで

ほぐれて  
溶けるまで  
待つことしか  
見えない

## 紫陽花

坂本 久刀

山あいの飛鳥路  
廃屋の庭に梅雨時の  
濡れた風情で  
笑みを湛えている  
かつては家族の人と  
笑顔で親しんでいたに違いない  
色彩は鮮やかだが  
淡い哀愁が漂う

奥には池があり  
小さな群落  
大毬が重く垂れ  
憂愁のかげりを  
水面に落としている  
静寂で

まさに  
紫陽花浄土だ

考える歩となる  
争わず  
混み合って咲く花  
咲きざまを見て  
朽ちる日々を思う  
余白染めゆく  
おのが路

## 鹿児の流れ　　川のパエジ

眞田 千穂

ゆらりゆらり  
ゆられてきました  
この大いなる恵みの川  
母なる加古川の水辺に  
みましたよ  
きましたよ  
うらかな日々の  
優遊たる鹿児の流れを  
私達は死んでも  
川は悠久に流れる  
その音づきをいつも  
いつもきいています  
印南野から  
見え拡がる播磨灘  
思い出しますついで

先頃のここのように  
鹿児島の錦江湾に  
そびえる桜島 私は  
鹿児島からゆられて  
鹿児川へまいりました  
島から川は流れて  
流れて海に拡がる  
奇しくも妙なる島国  
豊かな大和の国  
日本民族の魂は  
沸々と噴き上がっています  
鹿児の流れにのって  
悠々と四海の渦潮へ  
星々の海原へと

## 花の平和

花の海原は透明  
光に映えて  
さくら　コスモス　なでしこ  
花の色を合わせて  
プリズムに通せば  
天への道が輝き出る  
あまの橋立  
三保の羽衣  
天女がすつと降りてきて  
耳もとで何とはなしに歌う  
花の平和を！  
花の平和を！  
武器に代えて花環を  
この天の下に

## 沼島発日本人ユダヤ人同祖の歌

淡路島の少し南方沼島は宝の山  
心がみごとに洗われ  
魂が浄められる宝玉の島  
今より約二千七百年前  
アッシリア帝国に滅ぼされた  
古代ユダヤ人たちがたどりついた島  
南ユダヤ王国のイザヤは  
自国も北王国と同じく滅びるぞと  
エルサレムから東の方へと向かって生き延びた  
太平洋に浮かぶ神秘的な美しい島  
沼島から一行の一派は四国へと  
剣山を中心とした王国を山上に建てた  
日本の最古の時代  
不思議な不思議な神祕の御業が  
天の御父のご意志でなされた  
御主に讃えあれ！  
御主に栄光あれ！  
すべては天の御父の御業による！



## たとえインスタントでも

佐野 博美

インスタントでもいい  
熱いコーヒーを淹れて  
甘い菓子を頬張る  
ああ、ほっとする  
時間のとがった氷が融けていく  
孤独が優しい風になる

吹きさらしの公園のホームレス  
葉の抜け落ちた枝の下  
髪と髭は伸び放題  
ベンチにひとり  
今日も、影のように蹲っている  
声をかける人もなく  
人々は彼を迂回しながら

心のうちで、無いものとして打ち消す  
この寒さは何だろう  
痺れるように凍りついた孤独の世界

絶望の底にいながら  
なお消え去ることもかなわない

今、私は不条理な絶望のなかで  
一碗のコーヒーに救いを見る  
絶望の底にやすらぐ宝石のように  
宝石の芯に燃える神の姿がかすかにある

## シヨン城の聖像

在間 洋子

スイス レマン湖畔の古城 シヨン城には  
バイロンの詩〈シヨンの囚人〉で名高い地下牢がある  
岩盤を彫り込んだ荒い空洞である

観光客の賑わいの中においても

湿った冷気に身が縮む

鉄の鎖や首枷が転がる薄闇に

眼慣れたころ

ガイドが指差した壁には

聖者の像が刻まれていた

死刑囚の手になるものです

一体 二体 いや数体か

いずれも未完の聖像は

岩壁におのずと浮かび出ているようであった

地上に出ると

騎士たちの華やかな活気が伝わってくる  
湖に面して大きな窓をもつ宴会場や  
歴代領主のスウィートルームがあり  
抜け道のような通路をたどると  
礼拝堂へと導かれた  
北アルプス地帯では  
比類のない質の高さを誇るといふ  
装飾壁画に囲まれた丸天井の 光につつまれて  
聖者の像があった

スイスへの旅はもう二十年も前のことである

それでも

薄闇のなかの聖像も

光のなかの聖像も

今なお わたしの中にたち顕れる

人であることの切なさを

生きていくことの切なさを

身に沁みて思う折折に

## 一輪の花

直原 弘道

群棲する  
山紫陽花の根本を縫って  
流れる溪流を  
小さな蛇がよぎっていく  
小山の背を登りきると  
開けた視界の裾に  
湖が光っている。  
草生い茂る頂上に  
名も知らぬ花が一輪  
やがて  
宇宙の星に進化する  
とでも言いたげに  
けなげに  
咲いている

(現代詩神戸251号)

## あれこれ

沖浦が死んだ  
牧が死んだ  
同年代のあれこれが  
次第にすくなくなってくる  
哀しいなんての思いはもうないし  
やがて俺も と思いはするが  
本音はまだ付き合いたくないのだ  
いまさら女が恋しいわけではなく  
ひと旗あげるゆめなどもないが  
この四五年書き残した断片を  
一冊にまとめてみたいなんて  
考えがちらついでみたり  
冬眠でもない春眠でもない  
うつつの世界を  
なんとなく彷徨っている

(現代詩神戸252号)

## 空を飛ぶ蛇

紫野 京子

空を飛ぶ蛇があってもいい  
地を這う季節は終わり  
より高く 宙を舞って

どこからが雲なのか区別がつかない  
黒い影が通り過ぎると  
突然の通り雨

虹のかたちになりたくて  
どこまでも昇ってゆく

## 切り岸まで

この世の果てには  
いのちの切り岸があって  
知らず知らずのうちに  
私たちはそこへ向かって  
歩いてゆく

時には蜉蝣の羽の広がりにも包まれ  
またある時には重低音のメロディが響き  
さらには風花が舞っていた

この世には見えない函があって  
決して開けることが出来ないまま  
ひっそりと置かれている  
私たちは気づかぬままに  
その函を探し続けている

手を伸ばせば  
すぐそこに届くのに  
誰も気づかず 通り過ぎてゆく

触れてほしくてたまらないのに  
透명한函のかなしさよ  
私はここ と叫んでいても  
風の音 雨の音しか聞こえない

## 師走の京都

柴田 実

南座で

猿之助の顔見世興行を見た

義経千本桜の四段目

狐忠信は念願の鼓を手に入れ

喜びのあまり宙を舞う

猿之助お得意の宙乗りである

鼓を持って

天高く消えてゆく

後には大量の花吹雪

興奮に身体を火照らせながら外に出た

粉雪が舞っている

寒々とした京の師走の夕暮れ

マフラーを取り出し

近くの建仁寺へ足を向けた

まだ紅葉が残っていた

私たちのようですね

と家内が言う

まるでメロドラマではないか

まあだ

まだ二十年も三十年もあるじゃないか

青い紅葉だよ

二人で笑いあった

だが

ひよっとしてあと一年かもしれない

京の師走の夕暮れは

急ぐように暮れてゆく

## 糸とんぼの来る日

鈴木 賀恵

皐月の末か水無月の初めころ  
糸とんぼが来る

毎年同じころにくる

三センチ五ミリくらい

深いみどり色の

小さい小さい糸とんぼ

あらっ

きたの

ベランダの巽角の藪蘭のあたりにいて

わたしの周りを少し飛んで

また藪蘭の方へ行き

目を離しているうちに

いなくなってしまう

ふしぎな

糸とんぼ

またね

来年もきつと来る

わたしがいなくなっても

くるのだろうか

心がかよっているような

あの糸とんぼ

岡象女<sup>みずはのめ</sup>

—— 伊勢田史郎<sup>\*</sup>追悼

鈴木 漠

清流を徒渡りしながら  
ころよよい疲れの低山歩き  
蜂が飛ぶ古民家の軒の化粧垂木  
日輪はめぐる日もすがら

池のほとりでパンタ・レイと叫ぶ女の子  
水の妖精、岡象女のイメージは  
詩人の愛娘が見せる笑窪、<sup>じわ</sup>笑み皺  
飛天の像を彫りだす名工の糸鋸

過去も現在も未来の時間の中<sup>\*</sup>  
未来もまた過去の中に存在する  
言霊はこだまとなって壁をスルー<sup>こしなま</sup>  
人生は零れ続ける砂時計の砂か

錯綜するころの八衢<sup>やちまた</sup>をたどり  
仰げば遙かに虹をくぐる渡り鳥

<sup>\*</sup>伊勢田史郎。阪神淡路大震災後の文芸復興に尽力した神戸の詩人、郷土史家。  
二〇一五年七月二〇日没。享年八六。

詩集『エリア抄』『錯綜する道』『低山あるき』『海のうえの虹』ほか。  
史書『船場物語』『日本人の原郷 熊野を歩く』ほか。

<sup>\*</sup>岡象女（みずはのめ）。水を司る女神。少女の姿に描かれる。

<sup>\*</sup>「過去も現在も…」T・S・エリオット『四つの四重奏』による。

<sup>\*</sup>自由律によるソネット抱擁韻の試み。

押韻形式は abba/cddc/ef/eggs

## 冬の日

関  
はるみ

塞ごうと包む心  
見付けられた隙間  
執拗に潜り込むことば  
重く

鋭く深く  
放り出したい  
今すぐ

念じつつ  
胸を二度三度と撫でた形代  
両手から離れ  
揺れながら波の上  
秘めたことばが  
途切れ とぎれ  
やがて水底に留まる

ゆるり首を伸ばす  
目覚めた石亀  
動くな  
近付くな  
あゝ形代が  
千切れる  
責めてはいない  
今しばらく待てないか

聞こえてくる気配  
洩れることば  
気まぐれな  
冬の日のためらい  
石亀よ悔るな



## ひがしひめじ

高谷 和幸

電車の殻からなる電車のみみに

4つのあしのままはけふしてかたらふとして  
みみのイヤホンをたたれ

一つ目のあしのままはつまり死んだあとの日から  
09の続きにある数字は絶滅の生のなざし。二つ目  
のあしのままは虹彩のもえるあつさがあなたであ  
るならばそれは誰かのために用意されたはてのな  
いしん<sup>ベッ</sup>だいの赤いのこり身でもよかった。(どこへ  
つづくのか)、(ドアを開けようとしていた)。三つ  
目のあしのままはうまれるまえから失敗したなざ  
しだったあたし。(窓から見えるひかるしよざいの  
もののははやい速度でわすれられていた)。四つ  
めのあしはゆらゆる黒い髪 (世界は決定されてし  
まった)。

電車の殻にみたされた事後性のうみのあじけなさ

(おのがおうじょうのくるしみにひたいがひたり)。  
座席のいずまいがやわからかにまう少しづつうご  
きが

町の影を垂直におとすひがんの風景へ

ままは4つのあしをかけて

4つのあしのままはわたしを置いていく

## 殃禍

たかとう 匡子

躰のなかでつなぎ目がひしゃげていく  
移動しながらきしみ音  
だれかを呼んでいる気配はするが  
言葉はなくよじれよじれて

手にしていた単行本の背表紙に放り上げられた  
やっこの思いで  
ぬかるむページのくぼ地に逃げかくれする  
どうにも得体のしれない  
全身真っ黒  
金色にひかる眼球がみえた  
ちよつとやそつとで消えそうにはない  
まばゆいばかりの残照  
さらにそのむこう側に  
鮮烈なひかり

シャープペンシルをにぎりしめて  
木の葉に小さい円をいくつもいくつも描いている  
中心には先ほどの眼球が  
疾走しながら  
耳元で刺客と名告る

きのうにつづいてきょうも大地が揺れている  
座骨から股の付け根  
太もも脹ら脛  
頭上で雷が鳴った  
と同時にほげしい風雨  
裏返りながら地平が鎌首もちあげた  
落石のかたわらで失神している  
それはわたしのなかで巣ごもる  
崩落した防護壁の夜

# ぼくらの戦争 中学生敗戦日記

高橋 夏男

## 1 空襲

天空を突き抜けていく幾条もの  
白い飛行雲の黒い尖端  
それがB29だというのが

殷々と 陰々滅々と  
ただ音ばかり腸にこたえる

## 2 教練

戦車を邀撃 自爆する少年たち  
鉢巻きりりと 竹槍の女学生

まるで届かんなあ と空を見あげ  
訓練用陶製手榴弾をにぎりしめる

ぼくらを彼女たちは避けなくなった

## 3 勤労働員

沖縄が陥ち 街も燃えつきて  
青空に機影はない

もう上級生も殴らず  
塹壕掘りの休憩も長くなって

兵隊さんと弁当を分け合って食べる

## 4 八月十五日

昼過ぎまでは暑かったが  
あのお方の放送のあとは  
ただもう放心  
なにもかも済んだ という顔だけを  
暗い電灯の下に寄せ合っていた

まだそこにいる

高橋 富美子

ののがあるが生まれた日には  
流された牛が泳いでゆく  
夏がおおきな口あけて  
呑み込まれそうですワタクシタチ

ののがあるが伸びあがれば  
海の蓋がひらくので  
そっくりかえった空うら返り  
釣り竿が岸壁に立ちならぶ  
極彩色のルアーが転がって  
カラカラと蟬が笑う

ののがあるはけたたましい  
耳塞がれた子どもは逃げてゆく  
待てええ

鎌ふりあげる狼の息なま臭い  
大風が去り  
鎮まる地球にアナウンス  
電車はみつつめの駅で停車中

ののがあるが歩きだすと  
山は動揺して火を噴き  
川の水があふれだす  
のお のお のある  
ののがある のある  
ののがある

## 証言

たかはら おさむ

「アジアの国々の死者たちや無告の民がいつせいに犯されたものの怒りを／＼噴き出すのだ」

（栗原貞子『ヒロシマというとき』より）

兵士は重い口を開く

「ある集落を襲い若い夫婦を殺害の後、生後三ヶ月の赤子を軍靴で踏み殺しました。この子が大きくなればわが皇軍に刃向かうに違いないと思ったからです。この罪業は消えませんが……」

元憲兵だったY氏は涙ながらに懺悔する。

「物資の補給は無く全て〈現地調達〉。それはほとんど〈略奪〉です。日本軍の通過した集落は何も残っていません。家屋は焼き払いました。」

O氏は謝罪の気持を述べる。

「慰安施設は軍が管理し、慰安婦を監視していま

した。それは間違いありません。」

証拠写真を示しながらF氏は断言する  
元兵士たちは鬼の面を外して語り終える。

被害者たちは悲しい記憶を手繰り寄せる

「日本で働けば勉強もでき収入もあると、甘い言葉に誘われて「挺身隊」に応募しました。乗せられた列車の窓は塞がれ行方は知らされず、着いたところは中国の何処か分かりません。日本兵の性の相手を強要され軍と移動しました。……騙されたと気づいた時は手後れでした。この話をするたびに夜眠れません。」

文ハルモニは泣きながら話す。

「私は車夫でした。兵士に間違えられて捕まり、数珠つなぎにされて連行中機銃掃射を受け、倒れ

た人の下敷きになり助かりました。死んでいるかどうかを確かめるため日本兵が銃剣で突き刺して回るので死んだふりをしました。しばらくして重油をかけて火をつけました。私は鬼か人かわかりませんでした。がやつと逃げ出しました。」

手の甲の傷を見せて藩さんは恐怖の時を語る。  
「突然、広場に集められ四方八方から機銃掃射を浴びました。血飛沫が飛び散り、悲鳴 怒号 叫び 呻き……。私は屍の山から どうにか抜けだし、高梁畑に身を隠し這いつくばって逃れましたが、家族はみな死にました。私はその時十歳でした。屍は重油をかけられ焼かれました。」

時間の彼方を見つめながら楊さんは話す。  
「七三一部隊の建物が証拠隠滅のため爆破されて間もなくのことでした。放たれた馬やネズミが村に現れると奇妙な病気が流行り出しました。ペストです。家族は十九人中十二人が亡くなりました。祖母は気絶し泣きすぎて失明しました。姉は苦し

さに悶えながら眼と口を開いたまま息絶えました。」  
目頭を押さえながら靖さんは振り返る。

『ある朝突然、朝食の場に日本兵が侵入し、父母姉を強引に連れ去りました。私は恐ろしさのあまり物陰に隠れて震えていました。家族はどうとう戻ってきませんでした。幸せは一瞬にして消えました。私が六歳でした。人間とは思えない！人間のすることではありません！神はこのことを語るために私を生き残らせたいと思います。』  
アスセナ・オカンボさんは回想しながら断罪する。

証言者たちはほくに語りかけた

「このことを日本の方たちに伝えて下さい。」  
秦廻鉄道クワイ川鉄橋の側にあるプレートにはこう刻まれていた

〈FORGIVE BUT FORGET〉

## 「三月十七日 コロンダ」

滝悦子

列車が着いた  
遠くから来た

そんな声がして  
通り過ぎるつもりだった路地の奥へ 奥へ  
いそいで

銀色の車両  
大きな赤いドア 同じ角度で外向きに開かれ

日付と支払イノ金額 死ンダ人ノ姓名 日付と  
デキゴトだけを記し続け  
そのひとも降りた

終着を告げるアナウンス  
丸い天井に響いたざわめきや杖の音などなかったように  
しんとして

だが、ここから出る  
始発列車となつて行く

銀色の車両  
磨かれた赤いドア 迎えるように外向きに開かれ

窓際に座り  
シートの固さを確かめ  
日付と死亡推定時刻 氷点下七度 ひそひそと  
奇妙に賑わう夜のろうそく  
そのひとならはじめから棄てる飾り 縁どりばかりを  
かかえて

「三月十七日 コロンダ」

一行は遠く  
とても遠いけれど  
行先表示板が点くまえに  
ちいさなノートを買いに行こう

## 美術展へ行つて

田中 信爾

きのう美術展へ行く  
臓器移植をした児童たちの描いた絵  
決して上手ではないかもしれないが  
おそらく不安を抱えた子供たちの描いた絵  
魚の絵や  
海の中の絵

私も家へ帰って  
一枚の絵を描いた  
二葉のサラダ菜の絵  
子供たちの不安や必死さをおもいつつ  
一枚の絵を描いた

## 生きることは

田中 莊介

銃を掌に持てば  
引金を引きたくなる  
こころとはなれて指が  
撓ろうとする  
昨日と今日とが引き裂かれ  
ひろがる鮮血が  
空を覆い尽くす  
人はいつでも引金を  
引く機会に直面して  
片目を瞑っている  
いやその瞬間にも  
世界は狙いを定めて  
銃持つ人を斃さんと  
悪意に充ちて  
物陰に隠れている

銃持つ人には  
見えていない  
見えていない指は  
撓ろうとする  
おお次の瞬間には  
斃れるのは銃持つ人か  
悪意に充ちた世界  
なのか——きみには  
それがわかるか 本当に  
わかるのか



## 三つの世界

田中 敏弘

学問 信仰 詩

三つの世界の  
緊張と補完の  
はざまに生きる

その揺れのなかで  
バランスを崩さずに  
心の平安を保ちつつ  
どう生きるか

最後にはここに行き着く

学問に注ぐパトスを失わず  
悪しき科学主義を拒絶し  
学問も信仰の世界から

厳しく問いただす

そして

その世界を詩的告白として  
どう表現し

心癒されて生きるのか

わたしの生涯は  
ただここに尽きるのでは

## 採寸

武内 健二郎

マエミゴロ  
ウシロミゴロ  
ソデタケ  
キタケ

呪文のように  
祖母は呟きながら

幼いからだの  
縦横に  
物差しをあてていった

一枚の布の上に  
わたしは  
四角くかたどられる

布は  
身を  
孕む

まえみごろ  
うしろみごろ  
そでたけ  
きたけ

わたしはまだ  
四角い  
まま

## 大根譚

谷田 寿郎

儒教思想を説いた本に  
『菜根譚』がある  
菜根とは野菜の根のこと  
端的に言えば「粗食」のことだ

手元にある歴史資料集を開くと  
一九三〇年の豊作飢饉で  
飢えて大根をかじる子供の写真が――  
よく見ると葉付きのまま  
大切に抱きかかえている  
一九三四年生まれの  
コクミンガッコウ イチネンセイは  
戦闘機の爆音を聞きながら  
やはり大根をかじって 空腹を満たし  
戦意高揚の日々を送った

八十路を越えた昨今は  
大根をかじる力も失せ  
せいぜい大根の肌をさすっている  
あきらめきれず  
青首の部分を  
おろし金ですりおろし  
食べ物消化に余念がない  
すり残した大根の肌に  
軍国少女の白い足を思い出し  
やさしくなでなでして見る

## 花の木（湖東三山への途次で）

谷部 良一

そんな辺鄙な所に

黒く太い幹の半分ほどは  
朽ちかけていても

いまもなお

しっかりと構えて  
空を見つづけている木

春には枝という枝  
濃紅色の花を

空一杯に充実させ

秋には枝から降るように

夕陽の子供たちのような落ち葉を

地面に散らし

ときには

小動物たちの声を聞き分け  
虫とも話を交わし

鳥の苦情にのってやりしながら

今日も空を見ている

そこにじっとしていて

時勢が駆け抜けるたび  
常に力づくの葛藤が絶えず

うずくまる悲しみの集積

この枝にも沁みてくる

何かが壊れていく心配

行き止まりのような思惟

四百年もの間

天壤の時を過ごし

その年輪と共に

わずかに末枯れていきつつ

ただ木は

空を見ている振りをしていた

\*花の木＝カエデ科の落葉高木、樹高約二十メートル。

春、小花を総状花序に密生し木全体が紅く染まる。

秋、紅葉も美麗

## 猪のレシピ

玉井 洋子

おりかさなつて  
眠る  
七頭  
寸胴に  
ちいさな  
尻尾  
乳房をあらそう  
お尻が  
三つ  
小石を落としてみたくなる  
がばり

おきあがつて  
堰堤を搔く  
ずりおちた  
その後足で  
蹴り上げたのだ  
投げ入れられた一本のバナナ  
細い目がみていた  
町の浦橋  
昼の月  
海と山の狭間に  
棲み分けられていた

152

一線をこえ  
ひとり  
夜を朝に  
人里深く降りてきて  
攫う  
潮がみちると戻る川  
遡上する  
水の速さで  
去っていく一家  
おじいさんは眉間に深手  
父さんの耳には食いちぎられた痕  
母さんのアトピーは重症で  
瓜坊だけは無疵  
群れから離れ

受難のレシピ  
かぎわけている  
お姉さん  
ひびわれたコンクリートの川底に  
のこす  
爪痕  
アイ・アム・ア・ガール

153

## 昭和十七年十二月

玉川 侑香

戦争のなかで生まれ  
戦争のなかで青春をむかえた  
戦争のなかで仕事をみつけ  
戦争のなかで恋愛をした

戦争を否定することは  
暮らしを否定することだった

きょうも隣の八百屋のおっさんに  
赤紙が きた

おれは いやや  
チヨン星で軍隊にとられるんだけは  
いやや

おれが勤めているのは高尾鉄工所  
南洋興発が木造船を発注している栗林商船  
その下請けが荒田造船所  
その下請けがおれの会社  
その派遣工員にもぐりこんで  
おれは インドネシアへ行く

「徴兵猶予」  
これしかない

採用が 先か  
赤紙が 先か  
時間がない

新開地 狭い路地の奥

一杯だけ酒が飲める  
たむろする カクカクシカジカの輩  
数人の間を渡り歩きながら  
おれは一抹のルートをつかんだ

東京新橋東坂ビル七階「南洋興発K・K」  
貴族院議員栗林徳一に 面会

端正な長身の男は  
わずかに振り返って言った  
ごくろうだね しっかり頼みますよ

よし！  
おれはボスのお墨付きを手に入れた  
「大東亜共栄圏」の大地図の前で  
インドネシア・アンボン行きの第二陣  
おれは責任者となったのである

海軍省南方政務部にて  
工員十四名「陸軍軍籍離脱の証」  
「渡航証明書」が渡される

やったで！ やったあー！  
おれは深呼吸して  
小声で叫びながら狭い路地で小躍りした  
ざまあみろ  
赤紙とはおさらばや

おれは 逃げた  
赤紙から 逃げた  
新婚の妻からも 逃げた

昭和十七年十二月のことである

## 詩よ

月村 香

もう立って水をくみにゆくこともできないほど働いた日にもおしまいにはじけるあと少しやり残した日課も頭が爆発しそうなペインにもひとすじに抗おうとする今頃あの人はお酒を楽しみわたしは疲労のためにその液体を必要とするけれども求めるだけのだけのここで最後にやり残したことは亡き人を弔うようにできているひとびとという家畜が大きくあげるかちどきの声声そんなにまでして捨てられないときに本物だと決して言われないわたしの宝石である

詩よ

## プリエール

表紙もどこかへやってしまったノートだけれどこのしわくちゃなポームがそつとあわさるときにわたしは祈るもつと働いていいですかそして働きと動作のあい間にわたしはこのノートを広げ与えられた雪のような詩を書くそうしてまた働きに帰ってゆく神も許して下さらないわたしの我がわたしにぶどう酒は決して与えず働けと言うので仕方なくだがあるいは喜びを持って働いているのではなかつたか幼いときにあまり神様を呼ぶものではないと聞かされたから手をあわせることも少ないようにとそれでもわたしのプリエールは雪のようだ

Who has seen the wind ?

寺田 操

——誰が風を見たでしょう  
僕もあなたも見やしない  
けれどこの葉を顫わせて  
風は通りぬけてゆく

食事をするのもどかしいくらい

夢中で読み耽った

竹本健治『匣はこの中の失楽』

買い損ね

読み損ね

二〇一六年の薔薇の季節に

新装版をみつけた

ここで買わなければ、

ここで読まなければ、

読む機会を逃す

本屋のレジにまっしぐら

本のなかでは  
煉瓦の台に腰かけた浴衣がけの老人が  
薔薇の陰に涼を取りながら  
歌う「風」

——原詩 クリステイーナ・ロセッティ

訳詞 西條八十〔赤い鳥〕一九二一・六

作曲 草川信

五月とはおもえない夏日が続き

風が運んでくる歌声に涼をとった

ページをめくれば

薔薇の季節には

早すぎる風鈴の音色とともに

——誰が風を見たでしょう

歌声が

身体のおくで眠っている

何ものかの目を覚まさせた

翌日の夕暮れに届いた葉書

目を落とすと

そこにも

——誰が風を見たでしょう

歌が口をついてでてきます

女文字を裏返すと

丹後ちりめんに描かれた伊根の舟屋風景

あゝこの湾から

風が運ばれてきたのだと思ったとたん

風鈴の音に誘われて

舟屋の路地を急ぐひとの背中が見えてきた

そのひとが口ずさむ歌は

——誰が風を見たでしょう

ではなく

——風は誰を見たでしょう

歌詞の聞き違いかと耳を澄ませば

同フレーズで二番が歌われた

考えてみれば

風は通りぬけながら

ひとを見ているのだから

《誰が風を》

が

《風は誰を》

に変わっても不思議ではない

路地をひとりで歩く

あなたを見た風が



## 往きめぐる季は

鳥巢 郁美

沿道<sup>みち</sup>を埋める桜花であつた  
心含む如く呼ばわり燈る個を  
副い持つ其処 華やぎの一<sup>とき</sup>刻  
較ぶべくもない姿態<sup>すがた</sup>幾つ  
なべての晋みとる在り処<sup>か</sup>夫々  
艶なしてこぼし往く生<sup>か</sup>のその先  
踏みとり披く花姿幾つ

確かさを歩み刻む其処  
想いの夫々を侶<sup>とも</sup>連れていたろうか  
居並び成り往く生成の期の  
様式<sup>さま</sup>示す更なる姿態<sup>すがた</sup>の無数  
含み識したゆくりない道行  
燈り副い こぼし晋む個<sup>う</sup>の内部<sup>うち</sup>の  
控え包んだ それは生<sup>か</sup>の心域<sup>こころ</sup>だったか

灯しとる季の位置も亦  
其処<sup>か</sup>地<sup>ち</sup>の上<sup>うへ</sup>の秘め持つ在り処<sup>か</sup>  
像<sup>かたち</sup>成して揺れ含む刻<sup>とき</sup>夫々<sup>それぞれ</sup>の心意<sup>こころ</sup>を  
牽<sup>ひ</sup>き寄せ灯すなべての姿態<sup>すがた</sup>  
識し残す 妙なる像<sup>すがた</sup>のその無数の  
個夫々の籠りとる 生<sup>か</sup>の心幾つ  
纏い踏む生きざま示す独つびとつ

誘いこぼし たゆたう季を  
踏み識した夫々の妙なる体<sup>からだ</sup>躯<sup>た</sup>の行く手  
生命<sup>いのち</sup>は何処<sup>どこ</sup>を彷徨<sup>さまよ</sup>っていたろう  
揺らぎ灯す場を持つその位置に  
生<sup>か</sup>の心も歩みとっていたか  
細密<sup>さいみつ</sup>の域<sup>いき</sup>夫々<sup>それぞれ</sup>を展<sup>ひ</sup>き視る日の  
共々に副い示す地<sup>ち</sup>の上<sup>うへ</sup>の妙なる怪行

みみがさき

時里 二郎

ふるいひとの棲んでいた 耳ヶ崎  
《伯母》に教えられた  
ほねの径を行く

うすいさざなみ  
さりりさのほにが  
ひいとないて  
あしくびを浸す

しほみぐさ  
とりのたまご  
ひむり

ふるいひとは  
人形にもどる時間を

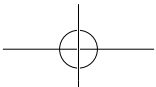
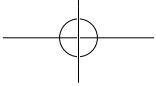
踏み抜いて ここに

みみがさき

あしゆびが聞き耳をたてて  
すあしのたてる  
すべすべしたひかりの息を  
聞いている

ふるいひとの ひとしずを  
そで見つけたことがあるからと  
手帖の切れ端に地図を描いてくれた

「みみがさき」



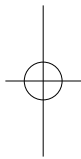
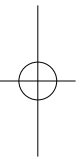
「みみ」  
ほら ほねのみちの  
みみ」

《伯母》のみみが しでり  
ここにないものと  
ここにないところを しじむ

みみがさき

と 《伯母》の口をまねて  
言ってみる

ふるいひとの背がふりむいたように  
はむしのはねが集まり  
《伯母》のみみかざりのように  
ひかっている



## 枯れ木に花を

時安 喜子

ここは老後を送るため移り住んだ棲家  
久本さんの経歴は 某有名私学の元校長  
奥様が亡くなられ半年もたたぬのに  
マンション内の独り暮らし高齢女性に  
誰かれなく声をかけてく  
最後に射止めたのがいち子さん  
日頃から 独り暮らしの不安を訴え  
寂しい怖い 独りで死にたくない  
誰かいて欲しい  
そんな時に見染められ？  
いち子さんの娘は肩の荷を下ろし相手に不足はない  
奥様の一周忌も待たず  
二人の新居をマンション内に別に一部屋購入  
住人たちの冷やかさもどこ吹く風  
久本さんと親しい安岡のおじいちゃんは

顔見に来たらただの婆さんやないか  
それも年上やというし……  
呆れ顔の人に お綺麗な方ですよ  
私は言葉を添えた  
病身のいち子さんが乙女のように華やいだ  
真つ赤なルージュ 高価なウィッグ ピンクのセーター  
短いながらもそれなりの蜜月を過ごし  
いち子さんは皆に看取られお先に失礼  
残されたじいさまは めげることなく  
マンション内で女性と交遊を深める会を作ろう  
と旗揚げ  
じいさま今じゃ 電動車椅子  
ヘルパーだけでは事足りずお手伝い雇い  
マンション内をお相手求め  
今日も車椅子走らせている

## 礼装

富 哲世

謀られる試煉が  
彼を夜空に誘い込んだのだ  
夜空は高く高く  
霧のフェルトのその彼方に  
温もりを置き去りにした  
はじめて見る成長を見せはじめていた  
酒瓶の内の囚われた淵と同じだけの空の暗い深さ  
十字路の舗石が迷わせる  
残り香の苦さと同じだけの  
しっとりした夜陰の馥郁たる暗い白さ  
開け放たれた門を街道から来て  
待ち人は輪郭の溶けはじめた  
影の身を硬直させことばを呑んで  
無意味にも微笑みながら  
星のまどろむ夜の清涼な高さを測る  
零落した木立の密集する湖のかたちを越えて黒々と丘向こうに横たわる

はるかな山腹の方から  
鐘の音が間遠く鳴り渡り  
Sの字の余韻に柵引いては途切れた  
石畳の下で動悸を搏って  
古布や木片や硝子のカケラの紛れた土が  
埋葬された星空に应えていた  
運ばれる綻びた水の忍び音が  
どこからか隠されて聴こえて来た  
静けさが極まり  
風も寝静まると耳の底から  
夜と切り離された地の果ての  
見えない後光に明るんだ不眠の奏楽さえ届いてくるかに思われた  
パステルで紙に描いた  
どこか傷んだカラフルで淡い螺鈿の葬列  
隔たりはすべてが遠い  
かといって思いがけない指呼のうちに明滅したりした  
闇という液体に覆われた青い夜に伴われて  
男は閉じ込められた街角に待ち構えて  
秘密めいて佇んでいる

## ブックカフェ・ZAKKA

豊崎 美夜

その本屋の入口には  
春の鉢植え。堇。堇。堇。  
ぴかぴかのスコップ。  
モスグリーンのゴム長靴。  
名も知らぬ花の苗。苗。苗。¥680

中に入ると本。本。絵本。

『Le Petit Prince』\*

旅の写真集の棚には

手作りの腕時計。 ¥45000

革表紙のノート。

木製のボールペン。

足元には帆布の旅行鞆。

本。本。本。詩集。

『夜中に台所でぼくはきみに話しかけたかった』  
文庫。文庫。DVD。

『El Espritu De La Colmena』\*\*

美しい料理本の横に

ホーローのマグカップ。赤。白。青。

パプアニューギニアのコーヒー豆が

この店のおすすめだ。

トーベ・ヤンソンの写真入りの評伝を

ばらばら

立ち読みしている客がいて

すっかり目だけになっている。

ここZAKKAでは

おいしいクッキーとお茶も飲めて

楽しいものがあるが

実は本物の本屋で

だから天井にはうようよ

世界中の文字が

浮遊している。

\*星の王子さま

\*\*ミツバチのなごやき

## 迷夢

内藤 富美代

遠のいて行く  
昔日のかなた

魔界からの呼ぶ声  
無理難題をつきつけてくる  
底知れぬ予感  
不運に打ちのめされる事には  
慣れていた  
いつだって  
肩透かしを食わせられた

迷夢から覚め  
山の上へ詣でるだけで  
霊肉が浄化され

とほとほ歩いて  
落としてきた足跡を  
探しに

春…むらさき芋虫

お気に入りの斑入り蔦にはきまって芋虫がついた。青々とした葉にクリーム色の縁どりがあるのをむらさきの糞で染みをつくる。青と黄と腸内細菌でむらさき色になるのが腑におちない。さわやかな小葉を食べながら芋虫は丸い花壇をむらさき色に染めるのだった。わたしはサンダルのかかとで彼らを退治しなければならぬ。夏になる前に、春が終わる前に、ぬるぬると踏みつけねばならない、ならない、芋虫はころころがりながらサンダルのつま先から脱げるのだった。

夏…ハチャトウリアンによる禿山の一夜

だからいわないこつぢやないよ、七十八回転の赤茶けた紙封筒から、そもそも無理なのだ、四角い紙袋に丸いレコードを入れ込むなんて。大人の目を盗んで炭素繊維のレコード盤を取り出し、テープルの中心にさしこむ。ここからとても難しいのだ。震えてはいけない、いけない、だが不穏なヴァイオリンの旋律が響く頃にわあっとわああつと、ハチャトウリ

アンがふりむくのだった。ギン！と切れた盤のその中心で冷たい風が吹きまくる。

秋…グツナイグツバイ

丹波栗は冷蔵庫で冷やして、一ヶ月ほどしてから栗剥きハサミでむきましょう。わたしの爪が柔らかくなってしまうのであの硬い殻を思い浮かべると、そう思うだけでわたしの爪は剥けてしまうのだ。栗より先に剥けるのは空想であっても冷蔵庫で冷やされすぎて丹波は凍り付いて長い眠りについている。もうわたしには食べることはできません。だからさようなら。マロンちゃん。

冬…消えたチビクロサンボのバター

例のトラはまだわたしの家で過ごしているのだけれど、誰にも知られずにトラと暮らすのはなかなかリスキーなことではある。だがサンボはトラの餌になるのにチビとクロとまたチビとクロで、差別用語扱いになって岩波絵本から永久追放されてしまったのだ。いや、トラは椰子の周りを回り続けてバターになって、わたしはトラは食べないがバターを食べる。サンボにグツバイといえなかった腹いせに、トラは黄と黒をいからせている。

行き過ぎがたき世に

永井 ますみ

木の葉がわずかに色づくころ ひそやかに木戸を叩く音がする  
二つ違いの大津皇子の切迫した声

姉さんこれでお別れだ あの人は自分の産んだ息子以外を生かしておく気はないのだ 黙っていても殺られる 反抗しても殺られる 分かっていた事だけど 姉さんはどう思う 言われるままに 我が母やあの 人と同じ血筋の天智天皇の娘という妻も娶ったし 命のさかりの二十三歳なのだよ

私が六つ 貴方が四つの時にお母さまに死に別れ  
私は十二の歳から神に仕える身となり 都の噂にも疎い  
こうやって二人 手を取り合って声を潜めていることさえ  
罪とされるかも知れない

たった一人の肉親と一晚抱き合って泣いた  
如何に生きがたきこの世でしょう

ふたり行けど行き過ぎがたき秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ※1

健やかな精神と肉体を持った男を 秋の朝 戸口に送る  
三十里のみちのりを  
伊勢 大宇陀 初瀬 飛鳥 大津皇子は馬を駆って戻っていく  
何かと口実を設けて殺そうと待ち構えているあの人の元へ

弟は案の定讒訴にあつて自害を迫られ  
若い妻も半狂乱でその後を追ったと  
風の便りに聞かされた  
やがて私にも都へ帰るよう命令が出た  
あれほど生きたかった  
弟の白い骨を拾った

定められた懐かしい山に葬る  
幼い頃から毎日見あげたあの山に

うつそみの人なるわれや明日よりは二上山を弟とわが見む ※2

※ 筑摩書房昭和34年刊 古典日本文学全集2

※1 「万葉集」第二巻 村木清一郎訳  
ふたりでも行けそうのない秋山をどうして君はひとり越えるか(106)

※2 なま身を持つ人のわたしが明日からは二上山を弟と思おう(165)

※1の前書き 相聞 藤原の宮で世を治められた天皇(持統天皇)の御代。大津皇子がひそかに伊勢神宮に下つて来られた。大伯皇女が作られた歌二首(のうち一首)

※2の前書き 挽歌 大津皇子の遺骸を葛城の二上山へ移葬した時、大伯皇女が悲しんで作られた歌二首(のうち一首)

※あの人 鵜野讃良皇后、後の持統天皇



## 精進料理

長尾 佳枝

精進物のお料理の滋味がわかる年齢も  
深くなりました  
うすい紙一重の差ほどの間から  
お便りをしたためています

がんもどき

イカもどき

鰻もどき

かしわもどき

ぎゅうもどき

おもしろい趣向の  
などなど

うつくしい皮肉も少しは含んだ表情を

泳ぐ目線で

嘘ごとね

なんて

言わないのが よろしかろう

嘘 と

もどき

本音を覆い隠された

この えも言えぬ舌のさびしさに

あらがい

なまぐさ包丁に匂いをいれる

焦げた肉のしたたりに  
健やかに

口もとをよごしてみる

## あじさいと銀の雨

中島 瑞穂

枕元の  
カンヴァスの中には  
いつも  
銀色の雨が降っていた  
花に埋もれた  
羽虫たちが耳をすます  
薬屋の娘  
だった母と  
少年飛行兵  
だった父の物語

何もない時代  
本が読みたくて読みたくて  
家にある薬の本でさえ  
読み漁ったものよ

そんな時  
復員してきたあの人が  
お土産に本をくれるわけ  
嬉しくってねえ  
本にほだされて  
一緒になったようなもんよ  
そこでいつものクスクス笑い  
くりごと  
むつごと  
よしなしごと  
花弁の数だけつぶやいて  
母は少女に戻っていった

雨の中を歩くと  
薄紫の明かりが  
こっちこっちと  
灯り始める

## 水平線が見える

中川 道子

時化で打ち上げられ 跳びはねる小魚  
バケツいっぱい 両手いっぱい  
家では 母の手料理が待っている  
すべて骨ごと食べて大きくなった  
波の音 跳ねる魚たち  
歓喜の声が聞こえてくる

今

皆同じ顔をして  
切り身にされ 並べられ  
あの勇姿はどこへ  
そばで貝たちが 砂をはきながら合唱  
魚になって  
今日も私は歌っている

程よい海水温の中で  
波に身をゆだね  
時々激しい海流を感じながら

真夏の海  
心地よい潮風  
深呼吸する波打ち際の反復  
遠浅で泳いだ波の感触

あの時の海を  
もう一度  
跳ねる白銀の  
生命が跳びあがる瞬間を

## 朝のあいさつ

中島 友子

きしみながらも  
持ちこたえてくれる家に  
「みなさん おはようございます  
ありがとうございます」  
何もしてやれないのに  
四季を楽しませてくれる庭に  
「よう頑張ってくれて」と  
お礼を言います  
そして  
時折 私へ  
「一生懸命だよね」と  
言ってやります

## 亡母の筆筒

片付けようと  
亡母の筆筒をあける  
懐かしいにおい  
夏休みの宿題で適当に作った  
私ののれんやエプロンも  
丁寧にたたまれている  
思い切れず そのまま閉める  
過去の囚人だと自嘲しながらも  
私は未来への力をもらっている

## 受難の時

## 今

かえるとダンゴムシが出会いました  
「お互い大変だったね」  
「かごの中へ入れられて  
どうなることかと思ったよ」  
「連休が終わってやれやれだよ」  
「そうだね  
これで夏休み迄は大丈夫かな」  
「その間につかまらないよう  
筋トレをしなくちゃ」  
「じゃあね」  
かえるはかえるとびをして  
ダンゴムシはころがるように  
草むらへ入っていききました

「箸はこうもって 細かい方が下」  
「トイレはここ」  
語気荒く言いながら  
今を懐かしむ時が来るだろうと  
思う私がいる

## 二歳

中島 友子  
中嶋 さやか

ねえねやにいに  
しかられると  
泣いてママのところへ行く  
ママにしかられても  
泣いてママのところへ行く

## 傘

中嶋 康雄

傘屋さんで買った傘が蔵から出てきた  
ばしゃばしゃとしていて随分重い  
何十年もの眠りから覚めたのはよいが  
修理する傘屋さんは随分前に廃れた  
商店街に傘屋さんがあった頃  
斜め向かいで商っていた同じ苗字の  
文房具屋さんは今も健在だ  
傘屋さんで買ったその傘は  
大正の生まれだという  
深くて長い欠伸をしたのと同時に  
しわがれ声でしゃべり始めた  
「腰が痛んでいるから修理しておくれ」  
傘はお里での修理を望むので  
お里はどこだと尋ねると  
商店街の傘屋さんだというので思い出した

小学生の頃に化石ブームが起こり  
裏の河原で化石捕りをした  
夏休み中も熱中していると  
二階の窓をガラガラと半分閉めかけて  
傘屋のばあさんがガラガラと蛙みたいな声で  
「もう夕飯の時間だから帰れ」  
野良犬を追い払うように言うので  
上半身裸で団扇を扇ぐばあさんに  
あつかんべえを皆でした  
しわくちゃの乳が垂れて揺れていた  
傘がしつこく修理をせがむので  
「今はビニール傘と折りたたみ傘の時代だ」  
というと傘は怒りに震えバサバサと  
ガラスを割って暴れまわるので  
残酷だとは思うが

「傘屋はもうない」と教えた  
庭の繭の木に縄を吊し首を吊ろうとしたが  
傘に首などあるのだろうか  
コンビニに連れてゆくと  
そこで売られているビニール傘に  
「この安直野郎め  
はやく忘れ物にでもなっけてしまえ」  
などと罵り大喧嘩を始めた  
そのうちにインターネットなども覚え  
京都の傘屋さんを検索し  
そこへ連れて行けとしつこいので  
「京都でもあの世でも自分で行けばいい」  
傘に冷たく言い放つと  
傘はバサバサと羽ばたき始める  
「もうすぐ台風が来るから止めておけ」  
と引き留めると繭の木の周りを  
得意げに飛び回って  
油蟬などをからかっていた

「おまえのおじいさんは随分遊び人だったぞ」  
と傘が言うので  
「おじいさんは毎朝  
ご飯に牛乳をかけて食べるような  
まじめな人柄だった」  
と反駁すると  
傘は得意げに語り始めた  
おじいさんは大阪へ行くと必ず  
若い女を連れて  
雨の道頓堀ですき焼きを食ったり  
台風の日には砂かぶりで大相撲を見物していた  
そんな千夜さんの雨傘に恋をしたのだ  
と遠い目をするが  
傘に目はない

## 堇色

中谷 恭子

薬局の猫は子供を生んで  
攻撃的になっている  
近寄るな お前に何がわかる  
父は  
五〇ccのバイクに荷物を積んで  
パラパラと高い音をたてて走って行く  
日暮れの街の  
打ち水  
湿った土のにおい  
格子の向こうに薄い光が洩れている  
道子さんは  
列車に飛び込んだと狭い街で  
噂になっている  
もう死んだ気がするの  
笑う道子さんの

堇色の小紋  
赤橙黄緑青藍堇  
虹がかかっている  
あつちからこつち

七月

汐入りの河口から  
呼ばれたからねと  
道子さん

## 土に魂を

中根 美津子

冬の間 土の底に陽を当て  
空気を吸わせてやらんと  
ええ土にならない！  
喜寿を越えた農夫は  
大地の天地返しをする

曲がった体に鞭うって  
草を刈り 石を拾い  
モグラの穴を埋め  
畦シートを敷き詰め  
田植えの準備に余念がない  
準備万端整えたところで  
水口を開けると  
耕された土の上を

一気に流れ込み  
あつという間に  
みずうみが出来  
代掻きを終えると  
農夫も田圃も  
一晩じっくり寝て  
明日への英気を養う

やっと田植えが終わって  
静かな田圃が広がり  
水面に少し顔を出した苗が  
さざ波のように寄せてくる  
農夫は真ん中に丸くなって  
苗を片手に浮苗を植える  
その姿は小舟に似て

田植えをしてから  
農夫は寝ても覚めても  
田圃のことばかり気になる  
水回り 草取り 追い肥 虫の予防  
作業の数は百ほどある

手塩に掛けて育てた稲は  
水面下で大地に根を張り  
たくましく成長する  
そして待ちに待った実りの秋  
農夫は一息入れて  
田圃を見渡せば  
吹いてくる黄金の風

## ふしぎな電車―夢の中の記憶

なす・こういち

気がついたら  
いつの間にかそこにいた  
車内は 異様に  
静かだった

すべての乗客が  
メールを打っている  
下を向いて 何も言わず

空いている所に  
そうっと座り  
隣の人の手元を見ると  
文字が見える  
見えないはずの小さな文字が  
拡大されていて

〈いま どこにいるのですか〉  
と ある

相手は 誰なのだろうか  
待ち合わせの人なのか  
遠くへ行ってしまった人なのか  
返事が返ってこないらしい

乗り合わせた自分は  
いま どこに――  
居場所はわからないまま  
行き先もわからない  
車内放送もなく  
電光の案内も出ない  
窓の外はまっ暗だ

見まわすと  
黙々とメールを打つ人の手元から  
言葉が空中に立ちのぼっている  
〈いまは いつなのでしょう〉  
〈あなたは だれだったのですか〉  
など あちこちから

みんな 繋がりを求めている  
とんちんかんだけれど 必死なのだ  
下を向き 口を閉じて  
まわりの人とは話さない

車内には  
たくさん言葉がただよっている  
重い言葉もふわふわと浮いている  
多くの思いを乗せたまま

ふしぎに 電車は 音をたてず  
おのれの予定に従って  
ひたすら走る



## 女四代

西海 ゆう子

### 曾祖母編

一九二〇年代生まれの曾祖母は気が短い  
何故いつもそんなに急ぐのかと聞くと  
「逃げ遅れたら焼け死ぬ」  
焼夷弾が雨霰のように降って来て  
その下を空腹のまま逃げ惑った記憶が  
ずっと脳裏に刻み込まれていて  
敗戦から七〇年以上経っても  
曾祖母の苛ちは直らない  
気短と頑固と心配性が  
年齢とともにより強固になった  
明治女の気難しい姑と  
昭和一桁生まれの横暴な夫に振り回され  
家の中だけに生きて来た半生を思うと  
仕方ないと思ってしまうが  
曾祖母達の世代は気の毒な程我慢強かった  
せめて今もつと我が儘してくれて良い

### 祖母編

一九五〇年代敗戦後の復興期に祖母は生まれた  
誰もが貧しかったが子ども達は屈託なかった  
栄養不良で青洩を垂らす子も多かったし  
傷痍軍人と呼ばれる義足白装束の姿もあった  
小学校に入って給食に出されたパンや脱脂粉乳が  
美味しくはなかったが何故かハイカラな気がした  
そして成長とともに経済も上向き  
大学に入って自由と平等を学んだ  
家に縛られる同性の生き様を見るにつけ  
経済的自立が必要と  
仕事に就き結婚して子どもを産み育てた  
男社会の中で働き続け口惜しかったこと数知れず  
それでも沢山の人に助けられ職業生活を終えた  
これからはようやく得た自由を謳歌したい

### 母編

母は一九八〇年代  
まだ経済大国と呼ばれていた頃に生まれた  
両親の教育方針はおおらかで  
まあいい加減だったのでたくましく成長した  
大学の終わりに中国語圏に留学して  
沢山の友だちを作った  
ようやく職に就くも狭い日本に飽き足らず  
貯めたお金で英語圏に再度留学  
様々な国の友だちに恵まれ視野を広げた  
しかし日本では仕事を得られず現地採用で香港へ  
異郷で出会った同県人と結婚したが  
出稼ぎ外国人女性に家事育児を背負わず  
そんな子育てシステムに馴染めず  
二人して仕事を辞め日本に帰って出産した  
母になったが保育待機児を抱えて働けず  
時々の一時保育でようやくパート仕事に復帰  
いつか憂いなく働ける日を待っている

### 曾孫編

私は未だ胎児、女の子  
日々気儘に母のお腹の中で眠ったり踊ったり  
光溢れる世界に出て行く日を待っている  
ちよつと楽しみなのは曾祖母も祖母も母も  
みんなが私の誕生を待っていること  
私は三代の女たちの「希望」なのだそうで  
照れちゃうな  
曾祖母がいて祖母がいて母がいるから  
私が生まれて来られるのだけど  
二〇一〇年代春に私は産声を上げた  
私の生まれることを知った曾祖母が  
一時危篤に陥りながらも生命を取り留めた  
そして私の誕生を祝して女四代が並んだ  
曾祖母から曾孫までほぼ一世紀の女の歴史  
女であろうとなかろうと  
人として生まれたからには人らしく生き  
人らしく終えられることをただ願う

## 墓銘

西川 保市

四月に巢立ったばかりの一人息子が夏の宵  
いきなり星になった  
日毎に痩せ細っていく妻が  
来る日もくる日も憑かれたように  
——墓を 墓を……と言いつのる  
追いつめられた私は  
町を一望する最上山の墓地に  
急いで墓を建てた  
しきたりどおり銘板には  
父母と息子の戒名を 並べて刻む

それから三十余年

春秋の彼岸・祥月命日・盆正月と  
欠かさず墓参りを続けてきたが  
いまだに 誰の戒名も覚えていない

そこで私は

つねづね妻に告げている

——儂の戒名は知らない

墓銘は西川保市だけでいい と

三途の川の渡しに着いたとき

——戒名を持たない者は舟に乗せない  
と断られても 私は

あわてず臆せずのんびりと

賽の河原で石でも積んで

夜は そこで野宿をしよう

満天の星を仰いで——

そのうち じっくりと

墓銘のいきさつを話せば きっと

鬼の渡し守も分かってくれるだろう

## 蛇と茗荷

西村 好子

出来上がったばかりのコンクリートの階段を  
大きな白い蛇がゆっくり上っていく  
大工さんもペンキ屋さんも施主の私達も  
安心して見ていた

蛇の寿命がどのくらいなのか知らない  
今も椿とジャスミンと茗荷の茂みの中に  
生息しているような気がする  
もう、四十三年もたっているのに

茗荷は放置して花が咲いて食べられない  
葉っぱを茗荷饅頭にした  
白いもち肌で薄緑の葉脈が浮かびあがる  
こしあんと饅頭も手作り

遠縁三名で葉っぱに包んだ饅頭が蒸し上がる  
野趣があると自画自賛  
子供はパクパク  
あの頃が幸せだったのだろう

こしあん作りの母は他界  
米寿を過ぎた遠縁は施設  
今では、茗荷も葉っぱも御用済み  
手作りのおやつもいらなくなった

そのうち  
蛇の子孫もただ白い骨になるだろう  
わたしも もう一人のわたしに  
なるだろう

## 潮の音

西村 善三

砂を巻き込みながら寄せては引いていく  
ザーッ、ザーッという潮の音が  
あの忌わしい記憶を忘却したかのように  
ゆっくりとした時を刻んでいる

この海沿いの田舎の港に移り住んでから  
もう二十年になる、まだ二十年かも知れぬ  
神戸の震災で肉親を失い、友人を失い  
そこに留まることが出来なかったのだ  
ただ、逃げ出してきたのだ

時折、釣り糸の錘おもりに引かれるように  
いたたまれぬ思いを抱きながら  
海辺をぼつぼつと歩くことがある  
この秋の夕方の日もそうだった  
岸壁に腰をかけて海を見ていると  
帆走する一隻のヨットが目に入ってきた

それをぼんやりと見ている内に  
一羽のアオサギが舞い降りてきて  
小魚を狙って波打ち際を歩き出した  
長い首を伸ばして獲物を探す姿が  
どこかはぐれ鳥のように見えた  
何度も行ったり来たりして  
同じ動作を繰り返した  
目と鼻の先に仲間のいる巣があるのに  
いつまでいるつもりなのだろうか  
捉えられたように、離れられずに  
その動きを追っていた  
三十分も経っただろうか  
急に波が変わって満ち潮になっていく  
大きな波がザーッと押し寄せてきた時  
アオサギは驚いたように首を振り  
キーンという鳴き声を上げて  
長い翼を広げて飛び去っていった  
静かな海面には、取り残されたように  
波光がきらめいていた

## 青松園

にしもと めぐみ

高松の港を出て15分ほどで大島に着く  
波は高松より荒く牙を剥く  
迎えてくれたのは立派な松

### 青松園

1909年からハンセン病患者を受け入れ続けた療養所だ  
納骨堂には、2500あまりの遺骨が遠く海を眺めて眠る

入所者たちが歩いた道を踏みしめる  
雨でぬかるんだ道

一匹のセミが空を見上げて死んでいた

死んだ後の霊がせめて自由に空を飛べるようにと  
島から帰ることができなかった人々の  
静かな暮らしを見た一日

## あの夏の日

野口 幸雄

最後の客を送り出した その時 この辺りに  
風呂屋はありませんか と訊ねられた 友人  
三人車で日本一周の卒業旅行中なのだという

風呂ならうちのに入っていきなさいよ いい  
んですか そうと決まればゆっくり灘の酒を  
飲もうじゃないか ということになったのだ  
(昼間働いて 夜学生だった私には 卒業旅  
行という言葉が眩しかったのかもしれない)  
三人がなぜ友達になったのか 将来のことや  
彼女のことなど 一杯一杯しゃべりました

北海道から旅をしていた大学生です はや二  
週間がたち全国の旅も無事終了しました 知  
らない僕ら三人をお風呂に入れてくれただけ

でなく泊めていただいたことに感謝していま  
す 久しぶりで手足をゆっくりのばして眠り  
ました 日本全国旅をしてきたのに土産話を  
聞かれると神戸のことを話します 北海道は  
北の大地ということで野菜ぐらいしかなか  
ダンボール一杯のトウモロコシが届いた

ご無沙汰しています お店の方はいかがです  
か あの夏の日から一年が経とうとしていま  
す この時期 思い出すのは神戸のことです  
いま考えるとありえないことだと思っていま  
す 僕らはなんとか就職もきまり きついで  
すが頑張っています もうあんな旅なんかで  
きないですよね……  
いやきつとまた三人で神戸に会いに行きます

## 花野

野田 かおり

読みかけの文庫本のページはそのまま  
奏でられることがなくなったヴァイオリン  
古い椅子は真正面を向いて  
訪れてくれた気配  
見渡すと  
あなた

ここにいるのといないことが  
輪舞のように届けられ  
ひとりの部屋に  
緑の光は満ちて  
さつきいたのでしょう  
あなた

深い午睡より覚め

おとろえて緑の光  
梢のあたりにうずくまった風が  
紙飛行機をのせて  
その向こうに花野  
銀の手を揺らし  
振り返って  
あなた

さて  
秋桜が一輪  
本に挟まっていた

## 女

信定 和美

繕うことに飽きてしまった女は  
裁縫箱から取り出した糸の束を  
ぶちまけた  
赤だの黄だの青だの茶だの  
それぞれに用を達していたであろうに  
十二色の糸は畳の上で纏れ  
纏れた

それから大切に仕舞ってあった  
いまも白さを失っていない  
綿レースのワンピースを  
ピンキング鋏でザクザクと切り裂いて  
撒いた  
遠い目をして  
バサッと撒いた

向き合わないことが習い性になり  
見てもみない 一体その先に何を見るの  
問いかけられて 女は笑う  
はたらき そだて しょくし ねむり ……  
ながい歳月の  
追い立てられ 追い立てられ  
見てもみない 繕って繕った  
心のやりくり  
鏡に映し出された深い皺は  
証しのように 笑う

女はどこへ向かうのか  
撒かれた白いレースは  
纏れた十二色の糸に束ねられて  
送りの花束になる  
女の背を飾って



## ずっと見ていた

橋本 千秋

蔵の長持から出てきた一枚の長い板。色褪せた布を解くと「合資会社 五泉酒造」とある。こんな所にしまっていたのかと、父が手拭いで埃を拭う。

看板の掛かった入口の戸は、上半分がガラスになっていて、覗くと酒蔵の中が見えた。高い窓から日が射し込んでいる。祖父が棚にコップを置くと、パンパンと手を叩く。井戸端では祖母が瓶を洗っている。父が木箱を抱え、壁際に高く積み上げていく。台の上では湯気が上がるお米を、何人もの人が混ぜている。奥には大きな木の樽があり、梯子が掛かっている。桶を担いで登っていく人がいる。樽の中を覗いている。ボンボンと柱時計の音がした。祖母が立ち上がると、見ている私に気付かず、戸を開けて出て行った。

祖父の法事の席で、急に酒蔵の話をし始めた私に、集まった人たちは顔を見合わせ、誰に聞いたのかと聞く。祖母は首を傾げ、父は酒蔵の中にお母さんはいたのかと聞く。母はいなかった。戦争で酒造りを止め、酒蔵を取り壊したのは所帯を持つ前だったと溜息をつく。泣き出した私に祖母は駆け寄ると、この子は、ずっと空から見ているんだよと、抱き締めた。

## オケラ

八田 光代

夕方のウォーキング  
ブロック塀の内側から  
ギギギギ ギギギギ  
聞き慣れない鳴き声

風邪ひいたコオロギの酔っぱらい親父がカラオケでがなりたてている  
となりを歩いている連れ合いの見立て

オケラじゃないの と私

オケラの声はテレビで聴いたことがある

田んぼのような泥の中が棲み処

ブロック塀の向うは工場

塀越しに大きな桜の木が並んでいる

オケラの棲む環境にはみえない

風が冷たくなってきた

オケラは

財布の中だよ

もうすぐ  
冬がくる

## 懐かしい風景

浜田 多代子

猫の走る路地  
タイヤの鉢の花壇が置いてあり  
路地裏を向かい合わせに  
一階建ての五軒長屋  
簾の向こうでは  
浪花節のラジオ  
シャツ姿のおじさんが胡座をかく  
赤ちゃんの泣き声と  
おばさんの高笑いが聞こえる  
角にあったお好み焼き屋は  
紺色地のはげた看板がぶら下がり  
金釘流の  
ひらがなの文字  
おこのみやきの  
おの字の点がかくれんぼしていた

子供の足では  
随分と遠かった路地  
猫の走る道の両側にある  
古い焼杉の長屋は  
いつの間にか更地になり  
埃の舞う風の道に変わる  
自転車が二台  
傾いて止まっている  
吹く風は  
昔のままに  
子供時代の味覚の記憶とともに  
目をふさいでも  
ガラスの引き戸が  
おばちゃんの褐色に沁みたエプロンが  
なつかしい醤油の香りが  
ああ  
いいなあ

## 先生の庭

春名 純子

長い時間が過ぎたので道も人も薄れていて  
拙い言葉の私は やっと先生の家を探し当てたのです  
開け放たれた玄関に立って「ただいま」と声を掛けたけれど  
誰も出て来ません  
気配だけ残して みんなはどこへ行ったのでしょうか  
庭で空を見上げる一本の糸杉の側で黄色とピンクの木の花が  
群れて咲いています

首輪に金の鈴を付けた三毛の小猫を見掛けませんでしたか  
「フランダースの犬」の話はよろしゅう  
プロコフィエフの「ピーターと狼」を誰が先生と聴きに行ったかって  
いいじゃありませんか  
風の日には風車の話をしましたね  
手作りの竹トンボは空高く飛び  
子供たちは ちち ははを越えて遠く行きました

ある日 私たちは「また会う日まで」と歌いました  
でも また会えるなんて誰も信じていませんでした  
開け放たれた玄関が黙って送り出すので  
私は春の道を帰ります  
影がついて来る真昼です  
風が吹くから歩きます  
過ぎて行くこれらすべてが たぶんもう  
先生の家です  
胸に少女を閉じ込めたまま少しづつ 白い石の階段を上って  
私はもうすぐ先生の庭の糸杉の側で  
一本の木の花になります

## 旗

平岡 けいこ

両腕を振り上げ  
力の限りポールを突き刺す  
大地に雄々しくはためく  
ここまで来た証明

たどり着いた証あかしに  
人は旗を立てるのだろうか  
人生の淵に  
神々しく揺れる旗に  
きみは何を描くだろう

月面に立てた星条旗は  
強烈な紫外線を受け白旗と化したのだろうか  
答えは月が知っている  
存在は持続することでゆるやかに朽ちてゆく  
永遠などないこの世界では

だからここにいと  
ここにいたことを  
わたしは示す

精一杯力を振り絞って旗を振る

きみを鼓舞する旗がみえるか  
歓声はきみの鼓膜を震わせるか  
ここがゴールだと  
導くために旗はあるのか

ここが頂点  
険しい山を制覇した証あかし  
後のちにつづく人たちへの目印

高く両腕を振り上げて  
わたしは命の旗を立てる  
ここが始まり  
終わりは未だみえない

## 雨模様

坂東 里美

### 雨の冠

雨の冠を被った人が  
笛を吹きながら  
通りの角を曲がってくる  
「あめー あめー  
ほっぺたの落ちる美味しいあめー」  
家々のドアが開き  
子どもたちが顔を出す  
「七色のあめはいらんかねー」  
色とりどりの傘が開き  
雨の冠の後に続く  
空は賑やかなお祭りの行列

### 震

小雨の降る  
午前八時の通学路  
段ボール箱の中で  
その子は濡れて  
震えていた  
黒いランドセルが  
のぞき込んでいる  
恐竜の子どもがいる！  
彼は目を輝かせて  
振り返った

### 霊

たましいの帰るところに  
金木犀が匂ってる  
雨の手が遠くで撫でている  
幻の黒い犬  
雨の並木をかくぐぐって  
こちらに駆けてくる

鈴の転がる音が  
微かに聞こえてきた

私には空っぽが存在する  
それは  
悲しいことではない

### 零

未明の雨は  
もう止んだろうか  
ベッドから体を起こすと  
胸のあたりから

### 霹靂

岩壁から  
垂直に落ちてくる青空  
目眩めく光の飛沫を浴び  
君は  
君の辛い歴史にサヨナラする  
雨は  
もう上がった

## とめどなく死者がやってくる 朝

福田 知子

たっぶりのバターを溶かし  
ホットケーキを焼く  
明るい日ざしがベランダからこぼれ  
整理しきれない言葉が複雑に絡んでいった  
折り畳まれた朝刊には幾重もの幸福と不幸  
でもね そのとき春一番の予報がラジオから流れ  
この世界をバターのように信じてみたい…って

とめどなく死者がやってくる 朝

ホットケーキを焼く

ブルーベリージャム オレンジママレード

熱くとりけるチョコバター

そこにあふれる死者たち

これら

死者たちは若すぎた

あなたがこの世に訣れを告げた 朝

天使たちのすすり泣きが聴こえたのよ

雨の中でシャワーを浴びるように泣いたけれど

エンジェルズ・クライは朝が来る前に溶けた

死者たちはバター

の

黄色い夜を

もっともっとかさねたかった…って、ね

## ピカソの顔

福田 さとる

パブロ・ピカソは 二十代の顔で普通に写っている  
六十代の時の 偉そうな怖そうな おじさんの顔ではない  
ハンサムな普通の青年が写っていて  
この後 ゲルニカの悲劇があり

第二次大戦があり  
ベトナム戦争があり  
無数の僕らの教科書に載っていない戦争もあった

ピカソの頭の中で

この後 私たちの目に見える姿の

裏側のイメージがどう発酵していくのか

ゲルニカも 女性の顔も

その本質を突いた忘れられない画像となって

今度は 私たちの頭の中に残っている

ピカソの絵の中で 私たちが叫んでいる  
ゲルニカの絵の中で  
あなたは腕を虚空に振り上げている  
あなたは私であり  
私があるたであるという事実におののいている  
このゲルニカを見ている私

私の目は

このピカソの若々しいまなざしに出会った  
出会ったのは美術館だったか 本の中であったのか  
もう定かではないが

私はピカソのことが大好きになった  
訳の分からないピカソの絵も



## ジェネレーション・ギャップ

福永 祥子

僕たちは生まれ  
させられて しまった  
父はいない 母もいない  
みんなは かわい〜いと  
夢中になるが  
そんなもんじゃあない

抱き上げることも  
触ることさえもできやしない  
が 僕たちは  
君を夢中にさせることはできる

役に立つとか 立たないとか  
僕たちが云うのもヘンだけど  
そんなことは 必要ない

要らないモノだけが残されて  
始まる明日もあるだろう

「生まれてきちゃってすみません」  
唯一 僕たちの贖罪のセリフ  
コンピューターの中で  
増殖を繰り返し 仲間を増やし続け  
無為に終わるはずだった君の一日は  
暇つぶしに夢中になれたはず

ほら君 よそ見しちゃあ駄目！  
真っ直ぐこつちを向いて  
何もかもを飛び越えて  
ここまで おいで

いつか僕たちが  
君を完全に支配するまで  
地獄の底まで追いかけて来るんだよ

## 循環バス

藤井 清

行き先不明の  
循環バスに乗った  
バスは適当に混んでいて  
乗車した僕を  
死魚の  
青いガラスの眼差しが見上げる

発車後  
すぐに目に付いた寸劇  
手鏡を取り出し  
口紅を塗る若い女  
隣のスポーツ紙を覗き込む  
中年の男  
辺り憚らぬ声高の  
老人連れ

観客の僕は  
何もすることが無く  
ぼんやり窓の景色に視線を移し  
何となく考え込む  
羞恥心が支えた  
この国の文化が衰退してしまった  
あれこれの理由を  
しばらく走って  
バスは降車場所に到着する  
見覚えのある場所だ  
はじめに乗り込んだ停留所だった  
降りてくる僕に手を挙げ  
僕は、行き先不明のバスに乗り込む

月曜日——灰皿に五本の吸いながらある  
 　　そしてマッチ棒も五本ある  
 火曜日——灰皿に七本の吸いながらある  
 　　そしてマッチ棒七本  
 水曜日——灰皿に九本の吸いながらある  
 　　そしてマッチ棒は九本  
 木曜日——灰皿に十二本の吸いながらある  
 　　そしてマッチ棒は十二本  
 金曜日——灰皿に十三本の吸いながらある  
 　　そしてマッチ棒はない  
 土曜日——灰皿に十五本の吸いながらある  
 　　そしてマッチ棒十一本  
 日曜日——灰皿には二十本の吸いながらある  
 　　うち三本は口紅がついている  
 　　マッチ棒は十四本あった

## 高校時代

友を失い  
 愛する人を奪われ  
 初恋の人とも交際できず  
 何もかもが灰色だった  
 あの頃

## ジュン

ジュンという君と同じ名のサ店があるので  
 その前を通る時いつも君が思い浮かぶのです  
 君と一緒に入りたかった  
 が、君は新しい愛を育てて  
 ボクから去ってしまった  
 ボクはそのサ店に初めて入り  
 　　そして、ジュンと店名の入った  
 マッチを持って帰った  
 そのマッチは一度も使わずに  
 机のひきだしに眠っている  
 ボクと君の恋の燃えなかつたように

## 家に帰ろう

牧田 榮子

まだ 明度ももちこたえる空で  
西側の雲が落陽に染まっている  
きらきら呼応する川の水面に  
一日はたらいだ鴨の家族たち  
流れをよけて寄りそっている  
彼岸花は土手まであかい  
ズック靴の先に草がからむ

携帯電話の着信音は鳴らない

着水する数羽の影

風をみようと

鯉がぼしゃんと水に跳ねる

そんなふうにみんなして夜をむかえ

ひとたちはあかりをつけ 電波を飛ばし

ゆうやけ映る川面 ではない 部分をみている

必要ならばハガキ 彼岸花と芒の絵をそえ  
急ぎの応えなら電話 繋がらないとおもわないで  
その時ではなかっただけのこと

さざ波がハミングしている

夕暮れが闇になるまえ

鴨はきょうのつくろいを終え

風がひんやり芒をなではじめる

家に帰ろう

ズック靴が露に濡れるのはいやだから

風に衿を覗かれるのはまっぴらだから

暗がりの彼岸花はあかくない

鴨はねむろうとしている

空はいつだって開いている

つづきあうながれの端で

きょう あした

土手とおなじ顔して

## 不在

増田 まさみ

無花果の木の根方に  
死んだ兎をうめる  
腐葉土のその辺り  
もつと掘れもうすぐだ  
スコップが  
母を急かす  
暗い穴ぼこへ  
跳ね返る小石のように  
弟は泣いた

飼鶏を縊り  
慈しんだ兎さえ鬻いで  
糊口を凌いだ  
あの、いくさのあとの  
一度きりの甲祭——。

黄葉が一枚ずつ幹から剥がれ  
止処ない記憶の  
どんな日めぐりに導かれ  
この世かぎりど泣いた  
遠いわたしが蘇るのか

無花果が熟れた  
もう誰もいなくなった  
空の庭に

ケ・セラ・セラ

松尾 茂夫

古稀過ぎたこの齢になっても  
週に一度は近所の医院で栄養注射  
月に一度は県立病院で血液と尿の検査  
長生きさせてもらえるのは良いが  
その費用が新生児や学童教育に  
負担になっていないかと  
ふと気になることもある

父は三十五歳でフィリッピンで戦死  
二十八歳で寡婦となった母は  
当時小学校二年生の俺筆頭に四人の息子を  
生家家業の婦人服製造販売を引き継ぎ  
なんとか育てあげて  
先年眠るように息を引き取った  
九十三歳だった

昔読んだ山上憶良の長歌で  
自分の長命を嘆いているのがあったが  
子や孫の行く末が気がかりで  
死ぬに死ねない思いを詠んでいた

俺の場合は息子二人はそれなりの職に付き  
娘も二人の母として  
まあ それなりに暮らしているが  
将来俺が長生きしすぎて  
呆けて 徘徊したりして  
迷惑かけることだってある

そんな心配してみても  
どうなるものでもないだろう  
ッケ・セラ・セラ 成るようになる  
そんな歌の文句のまま生きるとしましょう

## ホタル

松下 玲子

ホタルに誘われ  
梅雨の頃の雨上がり  
屹立する杉の木の連山を背に  
幽けし水墨の 暮靄の中  
谷川の早瀬はあまたの石に当たり  
水の神 白い竜の顔と化し  
せわしげに顔を持ちあげ 持ちあげ  
水の音 水の音  
かじか蛙も負けじと鳴いて  
薄闇になり 光り出すホタル  
ふわり 光り すうと消えて  
樹木 草むら 遠方の  
もう目が追いつかないよ  
上方で飛び交い 下方で待って  
たまゆら 青い光 現の恋

風景はもうぼんやり シルエットだけの  
気がつけば白い竜も居なくなり  
心澄まして川の音 と その時  
地の底からにぶい和太鼓の音が響いて  
ゆっくり三度も響いて 光と舞は続く

ゲンジボタル

人の手に止まって 見せてくれる  
酸素燃やされて光る発光器  
お腹の光は透明青白色  
背中の光は黄白色で 周りはずっすら虹色に  
天に向かって仄かに消えた

この頃の

毎晩くり返されるホタル舞台  
この世のもの あの世のもの  
虫の世界の不思議の二頁 又 増えて





## 山科疏水

瑞木 よう

なのはな  
さくら  
わきみず ながれ

なのはな  
さくら  
けあげ\* まで

なのはな  
さくら  
ひかり きらきら

\*けあげ＝蹴上。京都の地名。

なのはな  
さくら  
かぜ さんぽ

なのはな  
さくら  
しろい いす

## 満月幻想

壺に水が満ちて あふれ出す夜 湧き水は 岩の隙間から浸み出し 泉を作る  
草を沈め 花を沈め 根を浸し 透明に覆っていく 白い卵がひとつ 樹の葉  
の上に棲み 月満ちる夜 瞬り 水に落ち 泳ぎ始める それは小さな生き物  
緑の野草を縫い 咲き揺らぐ花を縫い 森の中の 誰も知らない泉の中 泳いでいる  
あふれる時が 壺から流れだし 溜まった水が 静かにあふれ続け  
泉は月光を映す やがて現れる古代魚 悠々と 固い鱗を月に光らせて 透明  
な泉の中を泳ぎ回る 樹の上から 一羽の鳥が飛び立ち 月の下を廻る 視野  
の欠けた鳥が見るものは 欠けていく光と褪色していく色 鮮やかさを懐かし  
み 見えない天を哀しんで 月光に視野を隠す 視神経を弱らせた太陽の眩し  
い光と熱から離れ 目の端に光る鱗をとらえて 月に向かって飛び始める 羽  
が泉に落ち 水紋を生む 水の中で空気を失くした樹の根は いっしか上に向  
かって伸び 水の上に垂直に幾本も顔を出し呼吸する 緑の葉はますます上に  
繁り 枝葉の中では 新しい卵がうまれる 闇の中 月の卵が瞬り 新月にな  
って空に落ちる 夜空の底には たくさんの色の星屋が 渦巻き 光り また  
たき 新星の誕生を待っている 空の壺に命満ちてあふれ出す夜 流れ星

## 明日

水こし 町子

八十個の赤い花の球根を植えた  
春になって  
土の中で  
芽を出せなかったのがある  
花になりたかったはずだ

箱に入れて  
つぼみばかり  
今年も娘に送る

海の近くに住んでいる友達に  
午後手紙を書く  
小学校の前にあるポストに行く  
途中

黒い猫が飼主と散歩をしている  
キャンバスに黒い絵具  
黒猫の絵になる

キャンバスに青い絵具  
須磨の海になる  
海の水のおいが好き  
さわさわする風のおいが好き  
海の上を走る長い道  
キー・ウエスト  
ヘミングウェイの記念館には  
たくさんの猫がいる

明日

箱の中のつぼみは  
夜通し  
長距離トラックに乗ってきたことに  
気づいているだろうか

キャンバスに赤い絵具  
赤い花が満開になる

## 足の記憶

宮浦 久子

陸橋を渡る  
揺れは 感じない

通勤で毎日歩いた長い橋  
お昼はまちまち きちんと取れたためしなく  
リュックの中は麦茶とおにぎり  
ビルは傾いて  
橋はいつも揺れていた

トアロードを歩く  
職場の跡は見上げるマンション  
向かいの医院は洒落たレストラン  
となりの信用金庫とホテルは同じ佇まい  
会議室やトイレを快く使わせてくれた  
信用金庫の支店長さんは今どこに？  
オムライスの美味しかった喫茶店もなくなり

その前で毎日夜を売っていた青年は  
どうしているだろうか  
歩く度  
足の裏から  
曲がった線路と壊れた建物の匂いが  
風のように染み渡り  
畳み込んだ記憶の襞から溢れ出し  
町みなが優しかった  
あの頃に連れて行く

夕暮れどき  
道行く人に向かって誰かれなく  
笑顔で声かけしてる  
炊き出しの人たちの姿が見える  
あったかいおうどん食べていき――

帰り道 陸橋が  
微かに 揺れた

## 参加しながら

宮川 守

こんなに不安になることはない  
途中でダウンする姿

想像はそこまで

それほど

おもしろくないことなら

やめればいいのにと

そうは思うのに

スタートにたちたいのは

なぜなのか

ぬかされているのに

おもしろいのか

自問する

同じことばかりを

汗をかき 気持ちよく見えるが

繰り返しなかで

自分を 見失っていく

それでもいいか

まあ いいのではとも

不思議なことをやっているのだ

ちがう世界にいるのだ

いいのか

かな

いやなのか

かな

そんなことを含めて  
立っている  
ほかには ないのか

震災から

何年かして修理もしたが

今年はベランダが

傾いてきた

羽根ありも 登場した

丈夫そうな柱は なかは空洞

ランコロンと ひびいている

自分の脚も

いつかそうなるかもしれない

## 久保山さんと久保さん——二〇一六・五・九の夕刊に思う

三宅 武

一九六〇・三・二五 スト破りの暴力団員に久保清さん(32)が刺殺される  
直後 第◎次 三池闘争支援 兵庫県一行  
夜行列車 大牟田駅 早朝下車 快晴  
「整列ッ」「気を付けエ」「番号ッ」  
「数日中に第二組合が 強行就労と思われる  
駐留斥候〇〇と △△ および□□  
立哨何名 動哨何名……」  
次々に出て来る 軍用用語 戦闘用語  
「ウワァ いよいよ戦争じゃア……」  
二十代の兵士だった男たちが  
被甲の星を 炭労三池 炭労杵島に変えて  
十五年しか経っていないのだ  
総労働対総資本  
向坂逸郎先生お手植えの 薔薇の花壇脇通過

お見舞いに行った久保家  
基幹産業の社宅は広く もうテレビがあった  
訪れた皆は 口々に決意を述べ  
遺影にカンパを供える  
「久保山さん」という者が何名かいた  
なぜ久保さんに久保山さんと  
失礼な呼びかけをするのか  
炭婦協腕章の奥さんは なぜ訂正しなかったのか  
久保さんが犠牲になる六年前 一九五四・三・一  
百四十トンの遠洋マグロ漁船第五福竜丸は  
ビキニ環礁水爆実験で放射能を浴びる  
帰国した無線長 久保山愛吉さん(40)は  
同年九月二十三日 死去

ラジオは数日 臨終の床にある人の  
脈拍数 呼吸数を刻々と伝えた  
広島 長崎に次ぐ犠牲者  
久保山さんの死は全世界の人々に伝えられ  
三月一日は「ビキニデー」になった  
六年を経てなお  
「久保さん」に「久保山さん」と言う人は  
兵庫県グループだけではなかったかも知れぬ  
当時の人気芸能人は 久保山さんの報道について  
「オンミヤクハクスウ何ぼ オンコキユウスウ何  
ぼ 秩父宮サンやないんやでエ」と言い  
間もなく 別件ですべての番組から降板  
人が死に至るまでを刻々と伝える前例は  
一九五三・一・四  
「秩父宮雍仁親王薨去」を告げるにいたる報道  
「オンミヤクハクスウ… オンコキユウスウ…」

二〇一六・五・九夕刊 「死の灰」から六十二年  
「あの海で あの日 わたしたちも被曝した」  
のペー千隻の船が航行中だったマーシャル諸島  
原告は元船員 遺族たち 国家賠償の集団提訴  
今になって公然化した いくつもの政治的幕引  
日社『世界大百科事典』 S社『日本百科全書』  
どちらも「三池争議」の項に久保さんの名はない  
久保山さんの名は  
両書とも「ビキニ環礁」の項に載っている  
今 広島を訪れたオバマの画面が映される  
ヤマタイコクソーリは  
いつ真珠湾へ行くのだろう  
オレは「あやしいこそものぐるほしけれ」と  
兼好法師の真似をしてつぶやくだけでいいのか

## 手を振り続ける

室井 正彰

八月は鎮魂と祈りの季節  
村の波打つ岬に立つ遺骨待つ墓石の  
線香が上げる白い煙に乗って  
戦死した兵士もつ家族達は  
今日も 南太平洋の空へ飛んで行く  
みんなは一固まりの白い雲になって  
赤道の大波の上を越えて行く……

巨大な蜥蜴想わずニューギニヤの  
大波打ち寄せる岸壁の草生す岩陰から  
一固まりの白い雲に向って骸骨の手振る兵士達  
飢餓に壊れた父が細い骨の手振るのが見える  
振向くと大蝸に似たフィリピン密林から  
火炎放射器で焼け焦げた夫が  
骸骨の手振り続ける

掌の姿したセレベスの椰子の木の下にも  
銃弾に砕かれた骨の手振り続ける兄や弟達

思えば  
国中こぞつての万歳で若い生命を戦場に送り  
白い雲のように日の丸の旗振った村人達  
村の波打つ岬に残した年老いた父と母  
そして 置き去りにしてきた妻や子供達  
彼らの姿を骸骨は目に浮かべ  
骨の手振り続けるのだ

戦後七十年 三十歳の兵士は百歳になった  
密林の陰に遺骨採集隊の日の丸の旗が見え  
腐肉の泥地に小さな蓮華のはなが開いて  
海岸の砂礫に無花果の実が赤く熟しても  
なお百万の兵士達は骸骨の手振り続けるのだ

今年もニューギニアから百三十七柱の骨が  
そしてビスマーク諸島から三百九十三柱の骸骨が  
日本東京の千鳥ヶ淵の  
無名戦没者の墓園に這い上がっては来たが  
南太平洋の島々の津々浦々では  
彼ら骸骨の涙が日々スコールになって渦巻き  
時にモンsoonになって荒狂ってはいないか

……八月は鎮魂と祈りの季節  
村の波打つ岬に立つ遺骨待つ墓石の  
線香が上げる白い煙に乗って  
戦死した兵士もつ家族達は  
今日も 南太平洋の空へ飛んで行く  
みんなは一固まりの白い雲になって  
赤道の大波の上を越えて行く

おおい 一固まりの白い雲よ  
僕らは大きく声を上げる……  
例えば 南太平洋の夕焼けの空で  
巨大な赤とんぼの群れのようにゆったりと舞え  
そして赤々と燃える夕日に  
羽音高く明日の非戦の誓いを歌おう  
地球に戦争の無い平和な日々が来て  
骸骨の手振り続ける兵士達みんなが  
一人残らず  
故郷の岬の父母の眠る墓石に  
必ず帰って来ることができるように

## 花のドミノ

ラヴェル「フォーレの名による子守歌」にのせて

望月 逸子

コブシの花の白い狼煙のろしが  
光の強くなった青空に一齐に上がる  
花のドミノが始まる合図だ  
コブシに少し遅れて桜が開く

風の便りが どんな鐘を鳴らして花に伝わるのか  
落花を待ち受けたように ツツジの赤紫の蕾が顔を出す  
ツツジは 咲いてしまうとそれぞれの方角を向くのに  
蕾のあいだはどれも垂直に天を指し示すのは何故

ライラック

桐 藤 エニシダ

オオデマリ

あの日 花のウェーブに乗り  
男の子が元気な産声をあげた

光と水の戯れのただ中に  
小さな握りこぶしを頬に添えてやってきて  
導かれなくても  
眼を閉じたまま乳を探り当て  
乳足りると眠る

わたしはその確かなリズムに 無条件に応じた  
あの子は天を真つすぐに示す蕾だった

無数の蕾が めいめいの方向を見つけて開き  
そして頂いた命をまっとうするまでのあいだ  
空から降りこぼれて良いものは  
陽の光と  
雨の雫

それより他の余計なものは  
無数の蕾の意志の上に  
二度と再び  
降って来るな

## 過ぎゆく

森田 美千代

陽射しはあらゆる木々のささやき  
疲れさせた  
最後のひと鳴き  
夕闇のなか  
悲しみを増幅させる  
かすかな生命の音色  
ひとり 押し黙る  
ひりひりひり

幾重にも重なった緑の山並みの  
向こう  
すでに消えたはずの  
記憶のそこ  
掬いそこねた水が指の間から  
滴り落ちる

過ぎゆく歳月を抱え  
無言の夏草を踏む

引き止めたり  
追いかけてたりするものなど  
だれもない  
里の片隅  
皆 巧みに脱ぎ捨て  
都会の影にまぎれていく

手を触れない限り  
うすい花びら そのままのおもさで  
野をわたる  
ぬけがらの跡が  
ひんやりと風景の重力に  
残した影 色濃く  
ゆらゆらゆら



## 鳥よ

安水 稔和

ここはどこなのか  
ここにいるのだが。  
ここにいるのは  
なにもものなのか。

見上げると空  
薄い空があつて。  
雲が流れて陽がさして  
小さな影が落ちてきて。

そうだった あれから  
ここにしかいられなくなったのだ。  
立って座って立って  
目を見開いてここにいる。

## くすぶる小枝

体が燃える  
心が燃える。  
走っている  
燃えて走っている。

木立が燃える  
葉叢はむらが燃える。  
燃える町のなかを  
崩れる道のうえを。

黒焦げの  
くすぶる小枝くわえて。  
そのまま  
そのまま走る。

## 声

どうしてなんだろうね  
どうしてもなんだろうね。  
黙るしかない 黙ろうと  
そう思っている。

話しかける  
声にならない声で。  
うつむいているものに  
顔をあげるものに。

話しかける  
声にならない声でなんとかやつと。  
やがて とどく  
いま とどく。

## 二十一年目

山口 洋子

暗闇で聞いただれかのラジオから一番最初に流れてきた死者の名前は同僚の息子さんの名であった

カレー粉の匂いがしてくるバターとたまねぎのいい匂いがしてくるあの前の日もそうだった正月のおもちに飽いていたからふじもとさん？いやおおたにさんか？とそんな近しい暮らしをしていた気のどくにあのころふじもとさんのおじいさんはパーキンソン病で入院していたのに病院がいつぱいになり水も出ない電気も来ていない家に帰らされ風邪をひきこじらせ一ヶ月もしないで亡くなってしまったお葬式で震災関連死にしたら保険がでないらしいとかひそひそばなしみんなどうしている

かな元気かなあ変わりないわけないわよネわたしがこの歳きようはりビングではなく畳の部屋にいるテレビは置いていない障子のなかからは外が見えない風が見えないそれでいいそんな気分きようは籠もっていたい数えてみる七千と六百と七十日カレー粉の匂いがしているバターとたまねぎのいい匂いがしている

## 沙羅の木

山下 晴久

夏のほとり  
あなたの声が  
聞こえていた  
あなたの足音と  
あなたの気配が  
近づくのを  
感じていた  
何の虚飾も  
驕りもなく  
静かにたたずむ  
沙羅の木のような  
そんな人で  
居られたら  
それは それで  
幸せなこと

あなたは  
笑っていたけれど  
人生は  
そんなことでは  
済まされず  
よくもまあ  
僕らは  
こんな長い間  
何を話し  
何を夢見て  
生きてきたのか  
思い出して  
それは それで  
思い出してみても  
夢のあとさき

これから  
どうしましょう  
それは それで  
少し考えましょう  
と言いながら  
あの日のように  
あなたは笑っている

## 棲み給うのか「皮クジラ」

山崎 啓治

痒い皮クジラが体のあちこちをゆっくりゆっくり這いずりまわる。そのたびにどこが太平洋だかアフリカ大陸だかわからないほど乱暴に描かれた世界地図は、ごちゃごちゃ、もう海なのか陸なのかさえ識別不能。もちろん小さな日本は見あたるはずもない。午前二時すぎ救急病院で「原因不明のウイルスによる蕁麻疹・赤色描記症全治二週間」と告知され点滴。「皮クジラ」即ち蕁麻疹の記憶は六十年前にさかのぼる。魚の缶づめラベル見ただけで腕に皮クジラが……と言うほどにしょっちゅうだった。鮮明なのは小四の運動会前日。徒競走一等を誓って寝ていたら痒い皮クジラが現れ、蚯蚓腫れの当日は見物だけの悔しい一日となった。こと。以来生魚をたべかけたのは三十近くになった。それから、それまで一切口にしなかった。昨夜のア

ジの開きが原因かと問うたが医者は「さて、引き金にはなったかもしれないが蕁麻疹の原因は七割不明なのです」と。六十年前に封印され、既に時効のはずの皮クジラのトラウマが体の奥深くひそかに棲んでいて「青魚食うなよ」の呪縛に、もう寿司屋には行けぬかも知れない……と思う。薬のおかげかまどろみが痒さをわすれさせるが、すぐに正体の掴めぬものが身をえぐり痒い痒いとうめかせる。きつと六十代ならこんな皮クジラ一晩寝たら治る。と、ところが赤ちゃん返りの始まるという七十代。ひよっとして、このまま逝くのかも。と気弱になった。大きさにみえるだろうか。

## ポケット

ポケットが三つ  
左のポケットには あした  
右のポケットには きのが  
胸ポケットには いまが

空っぽからの  
仕切り直した

はいつている はずがはずでなく  
いれた つもりがつもりでない  
空っぽ  
どのポケットも空っぽ

今度は  
内ポケットにしっかりと  
メモ帳を  
忍ばせて

でも  
もういいや

## ナイロビの風

山本 真弓

初めて空から見た  
赤い大地と蛇行する川  
アフリカが広がる  
丸い集落とアカシアの木が近くなる  
ケニヤッタ空港に着いた  
三百六十度視界を遮るものがない  
地平線から風が吹いてきた  
足を下ろすと生温かい大地  
体が楽になる  
先祖の地に戻ったような  
懐かしい心地

ナイロビはマサイ語で「水のある所」  
年中花が咲き 鳥が啼く  
ナイロビは赤道直下

年中同じ頃に陽は昇り 陽は沈む  
ナイロビは海拔千六百メートルの台地  
乾季 雨季はあるもの  
一日に四季が巡る  
動物たちはありのままに暮らし  
現地の人たちは澆刺と闊歩している  
夜は満天 星で埋まる  
太古から変わらぬ生の営み  
私は大地のゆりかごに眠り  
寝覚めのよい朝を迎えた

人工的な虚飾に飼い慣らされた魂は  
窮屈な箱から開放され  
不思議な安堵感で充たされた

心のひっかかりも  
何でもないことのように思えた  
驚きと発見の連続で心躍る日々  
アフリカの何もかもに  
魂が吞まれていく  
裏切りさえも気づかなかった  
愛しい大地を去る時  
苦い味は一気に飲み干し  
甘美な思い出だけを  
機上に乗せた

五月の風が吹くと  
ナイロビの風を思い出す  
かつてそこで暮らした日々が  
突然心を揺さぶる  
もう帰ることもない遥かな大地へ  
私の魂は飛んでいく

## 母となり

油井 和代

お乳含む赤子に  
微笑みかけるまなざしは  
ラファエロの聖母マリアを思わせる

愛おしく そーと頭を撫でる手  
すべてを包み込み  
母と子の空間

背筋をのばし 働き続けた娘  
母となり  
穏やかな母性の目ざめ

泣く子のオムツを替えながら  
泣かない  
泣かない

むずかる子を抱きながら  
泣かない  
泣かない

やさしい口調は  
ゆるやかな流れ  
なんとも心地よい

友達から  
お祝いのメールが届いた  
ぼちぼちね

泉<sup>せん</sup>

由良 佐知子

湯けむり  
小麦色の少女と浸る  
縁に頬杖ついて並び  
岩魚になって漂う  
夕闇の迫り  
ぼーぼーと鳴く  
裏山は下がり藤のあたり  
天下の険 羊腸の小径  
溪谷の温泉に  
二匹がいるふしぎ  
火照りは夜風が冷ます  
千年経て湧きいつる  
富士の伏流水  
深い泉の底に鎮まる碧の空を

よぎる魚  
水草は戯れ  
あつつうー  
飛沫を放ち  
若岩魚が躍りあがる  
湯気立つうすい背にうるこ  
赤み帯びた尾びれ撥ね  
なんとという遠さ  
湯も少女も  
地中深く熱せられ  
鉱物を含んで噴きあがった泉  
七歳は  
しなる  
魚  
刻刻  
渾渾

## ピエロ

横山 美代子

ピエロは舞台に立つ時  
人からピエロになる  
大きな鏡  
写っているのは疲れた顔  
自分の動き 仕草 表情一つで  
どっと起こる笑い  
人が楽しんでくれることで  
元気になる

顔を白く塗り

大きく赤い唇を描き 鼻をつけ  
最後に露草の絞り汁で涙を

舞台が終わり テントの外に  
少女が回転木馬に座って

うつむいて  
近づく一粒の涙が

少女の口からあふれでる  
言葉を人に投げかけても  
戻ってくるのは乾いた言葉  
淋しさが小さな水の固まりになって  
いるんな形に揺れ動いて

ピエロは人差指で  
そっと少女の涙をぬぐうと  
自分の涙の上に  
濡れたしずくは  
いっそう青味を帯びた



## 短詩五篇

吉田 草平

(短詩の原っぱ)

ちんちんちん 鉦叩きが室内で鳴きだした  
時間の浪費じゃぞ 慌てて追い出す

いちごのお母さんほほえむと 子たちは色づき  
姿を見かけなくなると 夏がきた

勤労数十年の鋏 儂より先に卒業か  
頭をたれ お見送りする

体長一ミリの縁白鬼蜘蛛のちびちゃん けなげ  
嵐のあと 星形の空の巣 朝日を浴びている

熱帯魚槽で羽化した 青い糸とんぼ  
窓の外は ささらぎの雪

## 君は何色

凜 清太

煙突から吐き出されるけむり  
それは燃えさかる、君の陽炎  
体から弾かれ、舞い上がる  
数々の想い

いまこそ

君の想いを僕に

死にたくなかった  
もつと、生きたかった  
もつと、愛されたかった  
もつともつと、抱きしめたかった

最後の最後まで

放り出せなかつたらう

悔しさ、怒り、虚しさ、孤独

そして、奇跡への祈り

僕は留めたい

最後の最後の、君である君を

その若さで旅立つ、君に  
潔さなど、何が要ろう

未練たらしく、惨めたらしく

我まま一杯に

濛々と立ち昇れ

真っ赤に、真っ黄色に、真っ青に

想いの色に染め抜いて

立ち昇れ

さあ、君の想いは、何色

## プラス1の愛

やさしく接するのに

刺々しい感触

期待とは

真逆の言葉が用意され

覗き込む

こちらの影すら見当たらず

確かめれば確かめるほど

煮立ち煮詰り

何時からか

瘤のような塊になった愛

こんなにも愛しているのに  
もわあーっと滲み出てくる憎しみ  
愛と憎しみの同居なんて  
有って成るものか

腹立たしいは

悔しいは

哀しいは

許せないは

如何にもこうにも

置き場がなくなつて

陽のあたる場所へ放り出してやった

しばらくして

愛がチョッピリ背伸びして見せた

「うん」と

頷くしかなかった

瀧へ

渡辺 信雄

歯が 抜けるように  
亡くなった父 母  
空っぽの 生家  
蚕が 食いつくした  
桑の葉の 葉脈が  
畳に 干からびている  
村を出た私は 村に捨てられた

\*

山懐 深く  
父である 瀧が在り  
瀧壺で 白く進むものを  
母が 受けている

伐り倒された 六栗杉が  
川に 溜められ

それに掴まり 浮いていた  
少年の夏から 遠く  
もう掴まるものは 何もなく

\*

地に 這いつくばり  
見上げると 瀧が立っていた  
宙の 懸崖を  
億万の水の粒 駆け降り  
私の 汚れた躰を 洗い  
背中に 一本の瀧 貫く

\*

誰も居ない 村  
霊気 漂い  
瀧の 音 鳴りつづけている